

第 6 回 奈良女子大学 オリンピック・公開シンポジウム採録 「オリンピックとスポーツ・ボランティア」

コーディネーター：井上 洋一¹⁾

シンポジスト：仁平 典宏²⁾・石坂 友司¹⁾・浜田 雄介³⁾

6th Olympic symposium records at Nara Women's University
The Sports Volunteers at the Olympic Games

Symposium coordinator : Yoichi Inoue¹⁾,

Speakers: Norihiro Nihei²⁾, Yuji Ishizaka¹⁾, Yusuke Hamada³⁾

要 約

本報告は、2018 年 11 月 17 に行われた第 6 回奈良女子大学オリンピック・公開シンポジウム「オリンピックとスポーツ・ボランティア」(奈良女子大学生活環境学部心身健康学科スポーツ健康科学コース主催, G 棟 101 教室, 14 時～16 時 30 分) の採録である。オリンピック開催に向けたボランティアの募集に関して、「やりがい搾取」と批判される問題の検証、ボランティアの社会的意義、スポーツ・ボランティアの特殊性とは何かといった切り口から議論を深めた。

(Research Journal of Sport Science in Nara Women's University, 21-1, 30-77, 2019)

Keywords: volunteers, sports volunteers, the Nagano Olympic Games

キーワード：ボランティア, スポーツ・ボランティア, 長野オリンピック

1) 奈良女子大学生活環境学部心身健康学科

Nara Women's University, Faculty of Human Life and Environment, Department of Health Sciences

2) 東京大学大学院教育学研究科

The University of Tokyo, Graduate School of Education

3) 京都産業大学現代社会学部健康スポーツ社会学科

Kyoto Sangyo University, Faculty of Sociology, Department of Sports Sociology and Health Sciences

1. はじめに——シンポジウムの趣旨説明

【井上】 定刻を少しすぎました。それでは、奈良女子大学生活環境学部心身健康学科スポーツ健康科学コース主催の、第6回奈良女子大学オリンピック・公開シンポジウム「オリンピックとスポーツ・ボランティア」を開催いたします。

本日は、多くの皆様にお集まりいただきまして、お礼申し上げます。本日のコーディネーター・司会を務めさせていただきます、スポーツ健康科学コースの井上と申します。どうぞよろしくお願いいたします。（拍手）

本シンポジウムの開催にあたり、はじめに、本学を代表して、今岡学長より挨拶いたします。よろしくお願いいたします。

【今岡】 みなさんこんにちは。奈良女子大学学長の今岡です。今回でこのオリンピックシンポジウムは第6回目になります。オリンピックを日本中で盛り上げようということで、大学の学長が集められました。バッジをもらってきて、それを配ったのがスタートでした。6回もやっていると、石坂さんは本を書くし、小路田さんの名前が最初に載っている本（小路田ほか編¹¹⁾）がこのシリーズとして刊行されています。

学生の皆さんにとって、今日はぴったりのテーマで良かったなと思うのは、オリンピックのボランティアに行く方はいと思いますが、物事には必ず両面があって、

その両面が一番顕著に出るものの一つがオリンピックかなと思います。これまでの議論でもそうでした。皆さんがこれから生きていく時代はとても大変な時代です。それは信じられないくらい大変な時代で、自分を守るためにはまず批判的精神を必ず持つておかないといけません。そのような時代がすぐそこまで来ているし、実際そうなっていると思います。ですから、自分の意見はどちら側だということ、そしてその根拠をきちんと持っているということが大切だと思います。そのような姿勢を常に持つてほしいというのが私の希望です。そのような意味では、今日、若手の先生たちが一生懸命議論してくれると思いますので、是非それを参考に自分の意見を確立していただければと思います。そしてボランティアもやっていただければと思います。ではよろしくお願いします。



【井上】 ありがとうございました。それでは、これまでの経緯と今日のシンポジウム開催の趣旨について、簡単に説明をさせ

ていただきます。

2020 年東京オリンピック・パラリンピック大会の開催まで、あと 1 年と 8 か月余りとなりました。オリンピックはスポーツ競技大会であると同時に、文化的なプログラムでもあり、ムーブメントでもあります。2020 年東京大会の開催にあたって、このムーブメントがどのように歴史的・社会的に継承されてきたのか、そしてそこに東京、日本がどのような意義を新たに書き込めるかということが注目されています。

私たちは、この東京オリンピックを考えるにあたり、まずオリンピック・ムーブメントの歴史的・社会的意味を 4 回にわたり探りました。具体的には、2020 年の東京オリンピック・パラリンピック大会開催が決まった直後の 2013 年に、「2020 東京オリンピック・パラリンピックを問う」を開催し、さらに 2015 年には、近代オリンピックの生みの親であるクーベルタンをとりあげ、その思想とオリンピック・ムーブメントの理念やそれを可能にした時代的背景と社会的条件を確認しました。そして、第 3 回は、2016 年に「嘉納治五郎が構想したオリンピック」として、嘉納治五郎に焦点を当て、開催をいたしました。さらに、2017 年には、「1964 年東京オリンピックを再考する」と題し、64 年大会を可能にした歴史的・社会学的文脈、すなわち高度成長という時代を視野に入れながら、戦後復興とオリンピックの開催という二つの要素から浮かび上がるナショナリズムの様

相、そして成功神話が現代にもたらす影響について検討しました。さきほど学長の話にもありましたけれども、これらの成果は、各演者の協力を得て『〈ニッポン〉のオリンピック』（小路田ほか編¹¹⁾）という著書出版することができました。この内容については、チラシが入口にあったかと思います。これは著名な執筆者も多く、高い評価を受けております。

これらの経験を踏まえ、前回第 5 回は、少し視点を変えました。「科学技術が変えるオリンピックの現在と未来」と題してドーピングをする身体、デジタル化する身体、科学化する身体といった切り口から科学技術とスポーツの親密な関係について議論しました。

そして、第 6 回目となる今回は、今話題となっているボランティアについて議論をいたします。東京大会では 8 万人のボランティアの募集が行われ、その意義とやりがい強調される一方、長期間あるいは長い時間にわたっての活動に従事しなければならぬことから、条件面への批判やボ



ランティアそのものの本質を問う声も高まっています。また他方では、昨今のマラソンブームに代表されるように、地域おこしを兼ねたイベント開催は、スポーツ・ボランティアと呼ばれる人びとの支援なしには成立しなくなっています。このようなイベントや地域社会、ボランティアとの関係性をどのように考えることができるでしょうか。本シンポジウムでは、ボランティアにはどのような社会的意義があるのか、その存在が開いていく社会の可能性と課題について、東京大会との関係性から議論をしたいと考えています。

皆様方のご協力によって、このシンポジウムがより意味のあるものとなりますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

なお、現在は、オリンピック大会とパラリンピック大会が連続して関係を持ちながら、開催されることになりました。用語も、オリ・パラのような使用をされることが多くなりましたが、主として両者を含んだ意味で総称してオリンピックという表現を今回も使用させていただきます。その点ご理解いただきますようお願いいたします。

それでは、つぎに本日のシンポジストの方々をご発言順に紹介させていただきます。

最初のシンポジストは、東京大学大学院教育学研究科・准教授の仁平典宏先生です。どうぞよろしくお願いいたします。(拍手) 仁平先生には、「オリンピックボランティアと

『物語』の動員——『やりがい搾取』論を問い直す」という題で発表していただきます。仁平先生は、1975年、茨城県生まれ、東京大学大学院教育学研究科博士課程を修了され、法政大学社会学部を経て、現職でございます。専門は社会学、特にNPO、ボランティア、市民社会論などで、著書に『「ボランティア」の誕生と終焉ー〈贈与のパラドックス〉の知識社会学ー』(仁平¹²⁾)、論文に「遍在化／空洞化する『搾取』と労働としてのアトーやりがい搾取論を越えてー」(仁平¹³⁾) など多数おありです。どうぞよろしくお願いいたします。

次にお話いただくのは、本学奈良女子大学・准教授の石坂友司先生です。どうぞよろしくお願いいたします。(拍手) 本日の報告は「長野オリンピックからみたスポーツ・ボランティアとは」です。石坂先生は、1976年北海道生まれ、筑波大学大学院博士課程体育科学研究科修了(単位取得退学)後、関東学園大学経済学部を経て、現職でございます。専門はスポーツ社会学、とくに長野オリンピック後の地域変容、また3つの東京オリンピックについて歴史社会的に研究しておられます。著書に、『現代オリンピックの発展と危機 1940-2020』(石坂⁷⁾)、『〈オリンピックの遺産〉の社会学』(石坂・松林編⁸⁾) など多数おありです。どうぞよろしくお願いいたします。

最後のシンポジストは、京都産業大学現代社会学部・講師の浜田雄介先生です。どうぞよろしくお願いいたします。(拍手)

本日は、「トライアスロン大会におけるボランティアとは」という題でお話をいただきます。浜田先生は、1981 年広島県生まれ、広島市立大学大学院博士課程修了後、九州共立大学スポーツ学部を経て、現職でございます。専門はスポーツ社会学です。とくにトライアスロンなどのエンデュランススポーツに関する参与観察が専門です。論文に「純粹贈与としてのエンデュランススポーツ」(浜田 5)、 「エンデュランススポーツの体験に関する一考察ー広島県西部のトライアスリート事例からー」(浜田 6) など、多数おありです。どうぞよろしくお願いいたします。

まず、シンポジストの先生からそれぞれ 20 分程度でお話いただき、そして、その後、議論、質疑の時間といたします。それでは、早速ではございますけれども、仁平先生からよろしくお願いいたします。

2. オリンピックボランティアと「物語」の動員ー「やりがい搾取」論を問い直すー

【仁平】 ただいまご紹介にあずかりました。仁平と申します。本日はどうぞよろしくお願いいたします。私はオリンピックとカスポーツに関する専門家ではありませんので、かなり雑な議論や誤りを含んでいるかもしれませんが、それはあとで他の先生方やフロアの皆さんからご指摘いただければと思います。



オリンピックボランティアに対する批判

本日は、オリンピックボランティアの募集が始まって以来、ネット等を中心に、批判の声が高まっているという現象についてどう考えればいいのか、ということを中心的なテーマとしていきたいと思います。ボランティアの意義については、国際感覚や語学力を向上させることができたり、経験しがたいような刺激を得られるといったことが説明されてきたのではないかと思います。これに対して、2016 年の 7 月にボランティア募集の素案が発表されて以来、1 日 8 時間、10 日間の研修に出なきゃいけないとか、外国語や高いコミュニケーション能力が求められるにもかかわらず、報酬は出ないということに対し、批判の声があがっておりました。そして今年の 9 月 26 日に募集が始まった前後に、その議論がピークに達しました。

このスライドは、ある 2ch のスレッドのまとめサイトの、しかもそのコメント欄という最底辺の書き込みからの引用ですが、いろいろなタイプの批判が書かれていまして、例えば、「そもそもスタッフをボラン

ティアという形で仕事させておいて、主催者側には大きな金が入ってくるという、現状の五輪のあり方こそ、誰も協力的になりたがらない理由なんじゃない。」とか書かれています。あるいは、『『本当にボランティアをしたい人』だけがやってくれば全然いいんだけど、そうじゃない人も動員された上で、美談で済まされそう感を一定程度の人が共有しているあたり、今回の企画側への信頼度がよく分かるよ』とか「たいのやつが交通案内とか誘導とかやろ。コンビニバイトの方が 100 万倍ましなレベル」とかそういったことがいろいろ、落書きのように書かれています。（ぶる速-VIP³⁾）

中にはこんなのもありました。よく作ると思うのですが、「決戦だ 今こそ活か せ人財資財 協力して五輪成功させん！ 扶け合ひの精神で！ 国民大動員！ 東京 2020」というポスターです。説明するまでもないと思うんですけど、第二次世界大戦時に国家総動員の文脈で作られたようなポスターのパロディです。

このような批判にはいろいろなポイントがあると思いますが、よく見られるのは、これはボランティアの名を借りた日本特有のブラック労働なのではないか、主催者やスポンサーの金儲けのためにただ働きさせるのではないかというものです。特にドーピングなどを調べる薬剤師のような専門性の高いボランティアに対しては、搾取だという批判の声が強くなる傾向があ

りますよね。今日の発表の前半部では、そういった批判がどこまで当たっているのかということについて、基本的なことを確認していきたいと思っています。

批判はどこまで妥当か

まず最初の、これは日本特有のブラック労働なのかという論点について見ていきたいと思います。確かに、最近問題になっている日本型ブラック企業に近いような現象のようにも見えるかもしれません。ただ、ボランティア大量動員型のオリンピックというのは別に今回始まったわけではなく、少なくとも 1984 年のロサンゼルスオリンピックのときには、5 万人を動員する大きな大会でした。その後、夏の大会の動員数は、5 万、2 万 7 千、3 万、4. 2 万、4 万、4. 5 万、7. 5 万、7 万、5 万などと推移しています（仁平¹⁴⁾）。今回の東京五輪は 8 万人ということで、過去最高ということになっていますけれども、それに匹敵するようなケースは過去もありました。条件も似たり寄ったりみたいのところだったと思います。ちなみに、11 万人という数字もよく言われるんですけども、これは大会を運営する大会ボランティアに、街中で道案内とかをする都市ボランティア 3 万人を含めた数です。都市ボランティアまで含めると、北京五輪のときが 50 万人を超えますので、そこでは過去最高を名乗れませんが、少なくとも大会運営の 8 万人というのはオリンピック史上最高だよ、とい

うことは今回の大会のひとつの売りとしてよく宣伝されるところではあります。いずれにせよ、ボランティアにタダ働きさせようという話が日本だけで見られるわけではないということを、最初に確認しておきたいところです。

2点目は、「金儲けのためにタダ働きさせている」という批判です。これは当たっていると思う側面もありますが、ちょっと違う側面もあるかなとも思います。まず先程言ったようにアメリカのロサンゼルス五輪のときからボランティアの大動員は行われてきましたが、この時の大統領はレーガンという人でした。彼は今でいう新自由主義という政治思想の代表選手のような政治家で、とにかく国の財政支出を小さくすることを目的に掲げていました。五輪も国が支えるのではなくて、徹底的に民営化して儲けを作る商業主義化したオリンピックの転換点となった大会だったと言われています。その結果、実際2億5千万ドルの余剰金を出して、オリンピックは儲かるんだというイメージを作り上げます。大量のボランティア動員が始まったのは、このような大会でした。

ここでのボランティアの目的というか機能は二つあると思います。一つは、言うまでもなく、ボランティア活用による人件費の削減です。もう一つは、商業主義という批判に対して、「いやいや、わたしたちの大会は人々の自発性に支えられてますよ」という清潔なカウンターイメージを作り

出すというものです。

いずれにせよ、この後、商業主義と結びついた五輪にとって、ボランティアはなくてはならないものになりました。ところが、その枠組みが一度大きく躓く出来事が起こります。同じアメリカで96年に行われたアトランタ五輪の時です。これも同じようにボランティアに依存する完全民営だったわけですが、ちょっと依存しすぎて、ボランティアが途中で大量に辞めたためにバス運行システムが破綻したり、警備までボランティアに頼ったためにテロを許してしまい、2人の死者を出すという最悪の結果を招いてしまいます。この事件への反省として、ボランティア丸投げ方式、民間丸投げ方式というのはさすがにまずいんじゃないかということで、国際オリンピック委員会も、ちゃんと行政が関与すべきという方針を出していきます。

それ以降、ボランティア募集、選考、研修なんかも、公的機関がある程度コストをかけて行うように変わっていきます。ですから今は、ボランティアを使う際も、丸投げではなくそれなりに時間とお金をかけて、しっかりボランティアが働ける環境を作ることが望ましいとされています。それにはそれなりにお金がかかるので、単純な安上がりとはばかりは言えなくなってきました。だから逆に、オリンピックのコスト削減のためにはボランティアの数を減らすというのがセオリーで、実際にリオ・オリンピックでは、経費削減のた

めに当初予定していたボランティアの採用数を 7 万人から 5 万人に削減しています。今回の東京オリンピックでも、コスト削減を求める国際オリンピック委員会からボランティアの数を減らすように言われたんですけど、いやこの過去最高の数字にこだわりますというのが、日本の立場です。要するに、ボランティアを使えばその分金儲けになるというほど単純な話ではないのかなというのが、ここでのポイントです。

続きまして、特に専門性の高い人をただ働きさせるのはおかしい、という論点について検討してみたいと思います。これも、過去のオリンピックでも同様なことは行われていて、ロンドン五輪のときは 7 万人のボランティアのうち 5 千人が医療スタッフでしたが、交通費も含めて基本的には自腹で活動していました。イギリス政府も、看護師たちのボランティア活動を推奨し、雇用者側も、従業員がオリンピックに参加してスキルアップしたら、それは自分たちの病院や会社のためにもなるという理由で、ボランティア休暇をとることを後押ししたというケースも聞いているので、専門性の高い人の無償労働だからいけないという話でもないんじゃないかなという気もしています。このように、批判を一つずつ過去の大会と突き合わせて見ていくと、今回だけめっちゃくちゃおかしいことをやっていると言えないように思います。そうすると、問いを反転させた方がい

いかかもしれません。つまり、そんなに異常なことでもないのに、なぜ今回こんなに批判されているのか、しかもそれが日本特有のこととして観察されてしまうのかということについて、考えてみたいと思います。

物語の不在

以下では、オリンピックボランティアに対する批判が起こる背景として、三点検討したいと思います。1 つ目は物語の不在ということです。ボランティアが大量に参加する活動は他にもいろいろありますが、当然ながら、毎回批判が起こるわけではありません。例えば東日本大震災のときも大量のボランティアが現地に駆け付けました。そのときは、政府がボランティア活動を称揚・支援したほか、少なからぬ企業が従業員をボランティアとして派遣したり、物品の無償提供を行いました。大学も学生のボランティア活動をバックアップし、場合によっては活動と絡めて単位を出すこともありました。被災地支援活動にはいろいろなタイプがありまして、地域のお祭りやスポーツ・イベントのサポートに、多くのボランティアが関わるということがあります。

このイベント運営型の活動は、外形的には、オリンピックボランティアと大きく変わらない可能性があります。でもそれに対して、やりがい搾取だという批判は起こりませんでした。批判自体はあったんですけどもその批判は、そんな活動をして意味あ

るのかとか、逆に現地の人に迷惑で自己満足に過ぎないんじゃないかといった形をとっていました。同じイベント運営型の活動であっても、「やりがい搾取」という形では批判が起こらなかったのは、それが「被災者のためになることを目指して行われている活動」という意味づけが共有されていたために、少なくともそれが「ボランティア活動」である、というところまでは了解できる。ボランティア活動としての効果が薄いことを批判する人はいても、それは「ボランティア活動」だということは前提になっています。

ところが、今回の2020年東京オリンピックは、そもそも何のために、誰のためにやるのか分からないという人が多い。復興五輪ということが言われてますが、多分言ってる人も含めてあまり信じられていないんじゃないでしょうか。言ってる人が一番信じてないんじゃないかという気がします。何でも東京でやるのかということも含め、大会を支える物語というものが、いまいち人々の中で像を結んでいないように感じます。

64年の東京オリンピックのときは、45年の敗戦で国土が壊滅状態のところから、これだけ日本は復興してきたんだよって、この世界に見てもらおうぜということが語られていました。その一方で、果たして本当に自分たちは世界に見てもらうに足るだけの水準に達しているのかという気持ちもある。見てもらいたいという期

待と、本当に見てもらって大丈夫なのかという不安とが入り混じる形で、国民全体の物語として機能していたのが64年だと思います。この時、自分たちが世界から見て恥ずかしくないかチェックしようということもやっています。例えば、都の商工会が事前に外国人に聞き取りをして、「飲食店に入っても、メニューがないので値段もわからないから、値段の入ったメニューを置いてほしい」という要望が出ると、すぐに改善の呼びかけが行われたりしていました。当時は、飲み屋とかでもツケ払いが一般的だったり、値段が明記されていなかったり、ちょっと慣習が欧米と違ったわけです。オリンピックは、そのような慣習を「グローバルスタンダード」に合わせて変えていくきっかけになった。それくらい、外からの眼差しによって承認を得たいという国民の欲望が強かったんじゃないかと思います。

これに対し、今回は、五輪ボランティアに賛成か反対かという以前に、そもそもこれは「ボランティア」なのかというところで躓きが起きている気がする。どういうことかという、賛同している支持者は、何らかの形で五輪ボランティアの意義を見出していると思うんです。例えば、外国の人とつながりながら共同でイベントを成功させることに、公共的な意義を感じているように思います。逆に、なんらかの公共的な意味を見いだせているからこそ、そのための行為を「ボランティア」だと自然に

認識できるのかなと。ところが、批判者の多くは、そもそも今回の五輪自体に公共的な意義を見出せていません。だから、そのための無償の活動を「ボランティア」と言われても、すっと腑に落ちない。「電通のためにタダ働きするのがボランティアなのかよ」という反応になる。つまり、議論の出発点である、それはボランティアなのかという状況定義のところですのでつまづいている人が多い、という気がしています。五輪を支える物語の欠如と、「ボランティア」概念の要件の不充足が、表裏になっているという可能性。これが一点目です。

実質的な「強制」への懸念

二点目は、さっきの批判で見たやつですけど、本当はボランティアしたくない人までやらされるんじゃないかという懸念です。そもそも五輪をなぜやるのか分からないし、気持ちがついていかないにもかかわらず、いつの間にか、それに協力することが善いことであるように話が進んでいる。そういう状況への不安や苛立ちが、動員への懸念という形で現れている気がします。そんな人が、8万人とか11万人とか集めるという話を聞くと、きっとそこでは無理な動員が行われるんじゃないのか、という気持ちになりやすい。これは実際、杞憂とばかり言い切れない面があります。そもそも8万人という数字がどこからきたのかよく分からない。2013年12月という早い段階で言われているんですけれども、根拠

がよく分からないんですよね。とにかく過去の五輪を全部上回る、五輪史上最多の8万人という数字がひとり歩きしていて、そのあと各自治体がどんぶり勘定的に都市ボランティアの数字を積み上げていて、最終的に11万人という数字が出ているんですけど、数字を出した以上、埋めるところが至上命題になってきます。本当に必要で8万人と言ったのか、過去史上最高にしたいという、そういうレガシーを残したいところで8万人という数字が出てきたのか、よく分からないけれども、いずれにせよそれが状況をしばっているのではないかと思います。

とにかく数字を出したからには埋めなきゃいけないというときに、どんなことが起こりうるか、長野冬季五輪のケースが参考になると思います。この時のボランティアは約3万5千人だったのですが、その中には、地域団体や企業などを通じて動員された人も多く含まれていました。さらに、運転手が大幅に足りなくなってからは、地元企業や自治体を通じて1万人近くが運転ボランティアとしてかき集められました。企業からの指示で従業員を働かせるわけですから、実態としては役務提供という概念になるかと思います。それを「ボランティア」というふうに呼んでいる。

今回はおそらく大学生への期待も大きいと思います。すでに2つの通知が文科省から出ております。一つは授業の一環として単位を付与することを認めますよ、とい

うもので、もう一つはオリンピックに合わせて学事日程とかを融通利かせていいよ、というものです。文科省は近年 15 回授業しろとか、学事日程を厳守しろとか、締めつけを厳しくしていたのはなんなんだという気もするんですけども、そんな感じでやる気満々という状況です。このようにいろんな手練手管で、11 万人という数字を埋めるために人々を動員するのでは、という懸念と、実態としては半強制でありながら、でもそこに自発性という耳障りのいい物語をくっつけることで、外から見るとボランティアとして仕立て上げるのでは、という懸念が批判の背景にあるのではないかと思います。

日本社会と「動員」

もっとも、別に動員だから悪いとは言えないケースは結構あると思いますし、そもそどこまで自発的かなんて、実際には相対的、かつ観察相関的なものだと思います。それにもかかわらず、なんで「動員」という形式自体がかくも警戒、忌避されるのか、という点は考えてもいいように思います。これが三点目に関わってきます。

私の仮説は、実は日本社会は、いろいろな形で無償労働に依存するような仕組みになっていて、動員をされていると感じる機会が多いのではないかというものです。

例えば、日本の伝統的な大企業では、休日に社内運動会や社員旅行のようなイベントがよく開かれていて、純粋な仕事では

ないけど駆り出されるということがある。社員の多くは参加したくないんだけど、休みづらい雰囲気がある。会社はこれを社員への福利厚生であると同時に、会社への愛着や社員間のチームワークの醸成につながると考えています。これは日本特有のものですが、なんでこんな変な慣行ができたのか。日本型生活保障システムと呼ばれる仕組みとのつながりで考えられると思います。日本では長い間、公的な社会保障の水準が低く、それを埋め合わせる仕組みを企業や家族が提供してきました。企業については、一人ひとりの従業員の雇用とその家族の生活を、終身雇用と年功賃金を通じて保障してきた。ところがこれは、会社が労働者を制約なく働かせる根拠や、「会社のために社員が尽くすのは当たり前」という価値観の背景になってきました。これは「見返り型滅私奉公」と呼ばれることもあります。社内運動会のようなイベントも辞退しづらい空気があるのも、この観点から理解できます。

そんな日本の会社が労働者に払う賃金には、生活給として家族の生活費が含まれています。その金で、配偶者は——多くの場合女性ですが——主婦として家事・育児を通じて家族を支える。政府はその分、保育園や高齢者介護にお金を使わずに済みます。この仕組みの中で、女性の家庭内の無償労働は称揚される一方、それが不十分とみなされる人は「母親失格」「妻失格」というレッテルが貼られ、道徳的な非難の対

象となりました。また、その無償労働の対価は、実質的に夫の給与の中に含まれているため、自分の正当な取り分として主張しづらい。むしろ「夫に食わせてもらっているんだから、感謝して家事をすべき」というように、主婦の無償労働は正当に評価されず、モラルの問題とされてしまう。この点は、フェミニズムが批判してきたことですが、にもかかわらず、なかなか変わらなかった一つの要因は、それが主婦にとって生活保障を伴っていたため「見返り型滅私奉公」として、長期的にはペイすると考えていた人が一定程度いたからだと思います。

会社、家族ときて、次に地域です。日本の地域には町内会をはじめとして、多くの地域組織があります。64年の東京五輪や98年の長野五輪では、そのような地域組織が、住民の動員に大きな役割を果たしていました。近年はだいぶ形骸化しているとはいえ、地域によっては未だに大きな役割を果たしています。これらの組織の多くは、欧米の自律的な市民社会組織とは異なり、行政の上意下達のような役割を果たしてきました。地域の清掃とかの住民の労力奉仕も、行政と息を合わせた地域組織によって主導されます。この背景には日本における政府と市民社会の特徴的な関係があります。意外かもしれませんが、公務員数の人口に占める割合は先進国の中でも非常に少ない方です。その少ない公務員の数で社会を効率的に動かすために、政府は明治

以降、民間企業や業界団体、地域団体、公益法人などを動員・コントロールする仕組みを発達させてきました。行政学者の村松岐夫が「最大動員のシステム」と呼ぶものです。これらの組織は、行政からの「指導」「意向」に従って動き、そのリターンとして行政から補助金等のメリットを引き出します。NPO法人は、その癒着構造を打破するためにできた制度ですが、未だに助成金などを通じて、行政からのコントロールを受けやすい状況にあります。

このように見ていくと、日本社会は、社会のいろんなレベルでアンペイドワークと動員が埋め込まれてきたと言えるのではないかと。ただ、動員される方もそれを「搾取」と考えていたわけではなく、長期的なリターンや安定性や保障につながっているから、合理的にその構造に関与していた面もあったと思います。

ところが、近年は終身雇用が崩れたり、従業員に十分な生活給を払えなくなったり、家族そのものが不安定になったりしています。地域も流動的になり、かつてのようなまとまりは失われている。そうすると、その構造から得られる長期的な見返りは期待できなくなっていくます。それにもかかわらず、これまでのように無償労働するのが当然、みたいなことをいわれても「割に合わない」という気持ちが先に立つ。これが、近年、「やりがい搾取」という言葉が語られやすくなった背景ではないでしょうか。その時代的な文脈の中で、東京オリ

ンピックが募集かけちゃったので、この上さらにタダ働きをさせるのかという反応を喚起させてしまったという側面があるんじゃないかと思います。

「リターン」の保障

以下では、それを踏まえた上で、どうしたらいいかという論点について、3点ほど述べたいと思います。

まず搾取されているというリアリティを作らないために、リターンを明確にする必要があると思います。例えば、活動を社会的にきちんと評価できる仕組みを作る。また精神的報酬を的確に得られるようにすることも大切です。長野五輪の話を聞いても、組織委員会は、ボランティアを手足のように使ってしまうとする傾向があるようですが、それはボランティアが活動によって得られるやりがいや肯定的な意味を抑圧してしまいかねません。だからボランティアを使う側がマネジメントをしっかりと行い、ボランティアの主体性や創意工夫を活かせるような仕組みを作らないと、不満が噴出することになるでしょう。

もっとも同時に、活動が、いつも精神的報酬を伴うわけではないというリアルな認識も必要です。長野五輪の時も、トイレの清掃や交通整理のような非対人接触型単純労務もたくさんありました。それをコミュニケーションスキルがどうだとか、語学力がどうだとかいう形であおって募集するのは、バイト募集でも詐欺に当たりま

す。そういった仕事こそ、ちゃんと条件を説明して、時給を払うべきじゃないかと思っています。ドーピング検査ができる高い専門性を持った人までボランティアとして募集することに批判がありましたが、そういう人たちは、現場でも先生、先生とか言われてチヤホヤされ、十分な精神的リターンがあるだろうから、条件を知った上で希望する人がいるのなら別にいいんじゃないの、と思います。逆に、精神的報酬を得られそうもない日の当たらない単純労務にこそ、金を払うべきじゃないかなと思います。そうすると、先程の「大抵の奴が交通案内とか誘導とかやる。コンビニバイトの方が100万倍ましなレベル」という落書きみたいなネット上の書き込みも、一面の真理をついているように思います。

労働環境を守る

もう一つ大切なことは、労働環境を適切にすることです。労働量、時間、暑さ対策などをちゃんとやる。当たり前のことです。私はボランティアだけでなく職員の過重労働を懸念しています。ボランティアは10日間でいいんだけど、職員はずっとやらなきゃいけない。ソウル五輪のときには警官が過労死してますし、64年東京五輪のときには職員が期間中に亡くなっています。ボランティアか職員か、有償か無償かに関係なく、安全に働ける環境をしっかりと整えることが重要です。64年の東京五輪では公式資料に次のことが書かれていました。

時間ないんですけど面白いので読ませてもらいます。「某会社の一幹部が社員の慰労見舞に見えた際、用談のすえ、平素面識ある人であったので戯談まじりに『OOC（注：組織委員会）のやり方は、労働基準法も何もなっていない。人使いが荒い』意味の話があったので、『雇用関係ではなく、オリンピックのための同志的結合だから嫌な人は引き取って欲しい』むね当方も戯談まじりに応酬してやった」。「応酬してやった、キリッ！」じゃないと思うんですけど、こんなこと言ってた頃に比べたら、今はちょっとましになっている気がします。

あと「ボランティア」でない行為を「ボランティア」と呼ばないことも大切です。これはどういうことかという、企業が従業員を「ボランティア」として派遣する場合、企業は従業員に給料払っている、これは「役務提供」にあたり、「ボランティア」ではありません。長野五輪のときにも、そういったケースがあって、実際には業務命令による派遣だったことが分かり、労働基準局から各会社の就労規則を守るように指導が入りました。「ボランティア」と呼ぶことで働かせる側の責任が曖昧になってしまって、ブラック労働の温床になってしまうので、きちんと「役務提供」と位置づける。ボランティアという看板の書き換えるべきじゃない。同じことが、大学教育にも言えると思います。ボランティアを丸投げにしてそこに単位を出すというのは、高等教育機関として責任放棄ではないで

しょうか。もし単位と絡めるんだったら、高等教育の内容としてふさわしい質を持つのか厳しく吟味した上で、事前の学習、活動、事後評価を行う必要があります。「ボランティア」という曖昧な言葉で安易に学生を動員していいことをした気になっている教育機関は、自ら自己否定しているようなものです。

「物語」を再構築する

最後になります。ボランティア募集に対する批判の背景に、そもそも今回のオリンピックが何のためにやるのかよく分からないというモヤモヤがあるという話をしました。スポンサー企業の利益のためなのか、そうじゃないとしたら、どういう公共的な意義があるのか。オリンピックを通じて、どういう世界や社会にしたいのかというメッセージが全く見えないということがあると思います。個人的には、64年の東京五輪が、形式面のグローバルスタンダード、つまりお店に入ってもメニューがないのは恥ずかしいからちゃんとしようね、というところを目指すものだったとしたら、今回は、ヘイトスピーチがある社会は恥ずかしいよねとか、障がい者がちゃんと社会参画できない社会は恥ずかしいよねとか、そういう実質的なグローバルスタンダードを目指してほしいと思います。そのように、どうせ五輪をやるんだったら、そこに込めるべき「物語」は何なのか、議論するくらいの方がいいですね。

例えば「平和」の祭典というけど、どこまで本気で言ってるのか、今の日本の空気を考えると疑問があります。これは 64 年の時の方が本気で向き合っていたかもしれない。64 年の五輪の時、現役の大学生でありながら国旗担当だった吹浦忠正さんという人が次のようなエピソードを紹介しています。いろんな国の国旗を作るときに、旗屋の会社の人を呼んだんですけど、「ふいに、『オリンピックの国旗は全部、平和のため。われらは若い時分、戦争のための旗ばかり作りよってに』……きらびやかなシャンデリアの下で、人目をはばからず涙をポロポロ流したのです。戦時中、旗屋さんは非常に忙しかったのですが、ほとんどが軍隊のための日の丸や旭日旗の作製。それから十数年経って、今度は平和のために大量の旗の作製を任されたのです。『只でもやる』と大変な熱意を見せてくださいました」(吹浦⁴⁾p.63)。こういった「物語」というか、これを通して何を、どういう価値を実現するのか、ということ、どうせ五輪をやるのなら正面から考える必要はないでしょうか。実際にはまだ多くの国が紛争状態にある。3 兆円あったらいろいろ難民支援ができるでしょう。紛争の解決や復興のための取り組みにも向けられるでしょう。「平和」を掲げつつ、膨大なお金をオリンピックに回すことの意味はどこにあるのか。それに見合うものをつくり出していかないといけないんじゃないかなと思います。やりがい批判

や動員批判が、そのような議論の回路へとつながってけばいいなと思います。

【井上】 ありがとうございます。いろいろな批判が出ているものに対してお示しいただきました。そしてその対応策について、2020 年に向けて提示していただいたかなと思います。それでは引き続きまして、石坂先生、お願いをしたいと思います。

3. 長野オリンピックからみたスポーツ・ボランティアとは

【石坂】 奈良女子大学の石坂です。よろしくお願いします。今回 6 回目のシンポジウムになります。6 年かけてやってきたということをしみじみ感じておりましたが、皆さんに来ていただいたおかげでこの場が成り立っています。改めて感謝申し上げます。

私は長野オリンピックから 10 年経った 2008 年から、大会後に地域がどのように変わってきたのかという調査研究を行ってきました。オリンピックで一番良かったことは何か、遺産は何かということを長野で聞くと、皆さんが必ず言われるのがボランティアの存在です。ではなぜボランティアが良かったのかということを聞くと、実はあまりわかっていなくて、なんとなく同窓会みたいなのをやっているみたいだよといった具合に、その実態はあまり知られていないのが現状です。行政の方もボランテ

ィアの組織こそが長野大会のレガシーだ、とおっしゃるのですけれども、現状はどうなっているのかと聞くと、いくつかの有名な団体などは名前があがってくるのですが、それ以外のところはあまりわかっていないのです。10年ぐらい研究をしてきましたが、東京大会でボランティアの話がクローズアップされてからは、比較的いろいろなことを考えられるようになったので、今日はその辺の話もしてみたいと思います。

東京大会の「やりがい搾取」論議

東京大会とボランティアについては、仁平先生の報告でだいぶ論点が出てきたので、私のところでは確認だけにとどめておきたいと思います。ただ、学生の皆さんも多く来られているので、東京大会をめぐるやりがい搾取論みたいなのが展開されているのはどうしてなのか、ご存じない方も多いかもしれないので、それだけ話しておきたいと思います。

最初に、ボランティアをめぐる問題には、商業主義批判というものがあります。東京大会には3兆円もの経費がかかると言われています。多分これでも収まらないと思うのですけれども、そのような多額の経費をかける一方で、ボランティアは無償です。ですから、ボランティアの人たちに対してもお金を払うべきではないかということですね。ただ有償にするとということを始めると、ボランティアはそもそも無償で

やるものなのだから、本質とは違うのではという話が出てきます。ではボランティアの本質とはなんですかというと、ボランティアの概念について共通した同意が取れていない状況で議論が進んでいるのが現状です。これは仁平先生がご専門なので、後でお話いただけたと思います。

2番目です。これがたぶん一番大きな問題ではないかと思うのですが、東京大会は真夏の開催が決まっていますので、非常に暑いことが予想されます。ボランティアに応募できる条件が1日8時間程度、10日以上できる人となっています。連続は5日以内なのですけれども、非常に過酷なボランティアになるということが予想されています。さらに言うと、10日以上できる人は誰か？ということになると、皆さんのような学生さんですとか、引退をした世代を含むシニア層、専業主婦の人などに限られる可能性が高いです。

また、そこまで過酷なことをしておきながら、交通費は1日千円程度、これも後で決まったのですけれども、プリペイドカード的なものが配られることになりそうだということや、宿泊費の問題があります。



東京の方は問題ないと思うのですけれども、全国から来られる方などはこの10日間、東京のどこかで宿泊をしなければなりません。非常に困難な状況になることが予想されますし、事前研修も必要で、これも全部自己負担になっています。このような条件が非常に過酷なのではないかということです。

3番目は、先ほどの仁平先生の話にありましたが、大学に対する批判がかなり強く語られるようになりました。ボランティアの単位化の問題もそうです。ボランティアに行ったことを単位として認定しよう、ですとか、ボランティアに行きやすいように前期の授業を切り上げてしまおうということに対して批判が起こったわけです。特に関東の大学が中心ですが、そもそもなぜこのボランティアに前のめりになっている現象が起こっているのでしょうか。そこは少し考える必要があると思っています。

4番目は、仁平先生のご専門ですけれども、ボランティアの本質をめぐる問い、すなわち、ボランティアについて私たちはどのような定義で考えているのかということです。今回の議論でも、ボランティアをすることが人のためになるというだけではなくて、やりがいのため、楽しいからやる、就職活動に役立つから、というようにさまざまに語られています。仁平さんの言葉を借りれば、〈贈与的〉なボランティア、すなわち、自分の時間を犠牲にして人のために尽くすというような、人に何かプレゼ

ントをするというようなことと、これらのボランティアは異なるものです。就職活動に役に立つとか、あるいは楽しいから、勇気をもらうからやるというのは、今までのボランティアの議論からはずれてしまうのです。ですから、なんとなく動機が不純であるというように考えがちです。例えば、ロンドン大会などは、ボランティアの募集が雇用に結びつくようなトレーニングとセットになっていたようです。ボランティア実習という名称のものを学校で経験してきた人もいると思うのですけれども、ボランティアは自発的に、無償でやるものであるにもかかわらず、なぜ実習になって、制度化されているのかということですね。そこをめぐる議論があります。

それからこれはあまり言われていないと思うのですが、ボランティアの選考方法に対する問題があります。これをボランティアマネジメントと言います。例えば10日間ボランティアをやる人が8万人、延べ80万人がボランティアをすることになります。これを例えば、2日だけでもやって良いということになった場合は40万人がボランティアをやるわけです。10日は無理だけど、1日、2日だったらやってみたいという方は結構いらっしゃると思うのです。では、それがなぜ許されないかということですが、それは、一つには離脱防止策として、意気込みがテストされているという側面。つまり10日を犠牲にしてでも来る人は途中で離脱をしないという可

能性が高いとされます。あるいは、先ほど仁平先生の話でもありましたが、研修をしたり、システムを作ったりすることにはものすごいお金がかかるので、一人に 10 日間やってもらえることで効率化を図っているということがあります。

それともう一つ隠れていて見えていないことは、このボランティアを誰が選考するのかという側面です。メディアなどでは 8 万人のボランティアは到底集まらないのではないかとされていますが、私は集まると思っていて、やりたい方はかなりいると思います。ただやりたい人をどのような仕事にはめていくのか、これはマッチングというらしいのですが、いろいろな技能や経験を持った人が優先されて、ボランティアが決まっていく仕組みが必要です。これを行っているのはあるボランティア団体の方々です。例えば長野大会や、FIFA のワールドカップサッカーが 2002 年にありましたが、そこでボランティアを担当した団体、集団などが中心になり、そのマネジメントを担当しています。ここにはボランティアの経験とか、これまでの関わりに対する、組織や人の階層化みたいなものが起こっていると考えられます。ですから、誰もが応募をして機会均等にボランティアができるということではなくて、最初の段階で経歴が判定されてしまっているのだと思います。そこは案外語られていません。

5 番目に、これは仁平さんのところでありましたので詳細は省きますが、通訳や医

師などの有職者、有資格者に対しても無償労働を要請していることなどは、配慮が欠けているのではないかという議論があります。

ところで、オリンピックボランティアと言ったときに、無償でボランティアをすることという定義は、私たちにすぐ想起されます。その定義からすると、今のボランティアのあり方は非常に問題があると思ってしまうのですが、ではボランティアではなくて、オリンピック・サポーターズという言葉だったらどうでしょうか。今ボランティアの愛称を募集中のようですが、こういうことは事前にやっておくべきだったと思うのですけれども、ボランティアではなくて、サポーターズであるということを使うと、恐らくこれほど批判はされなかったのではないのでしょうか。つまり、ボランティアをめぐる私たちの意識がどうも過剰に作用しているのではないかと思います。このことは先ほど仁平さんのところでもお話しがありました。

もう一つ批判されているところで言うと、ボランティアの募集の CM に広瀬すずさんが出て、4,000 万の CM 制作費をかけていることにも批判が集まっています。これを私がやるとすれば、過去に長野大会など、いろいろなボランティアに関わった人に一言ずつしゃべらせて、リレー形式で CM がどんどん出てきたら、多分それなりに楽しそうなイメージが喚起されると思うのですけれど、有名人が出てきてボラン

ティアに参加しましょうって、みんなが走っているやつはどうでしょうか。こういうイメージでどれだけボランティア応募者を取り込めるのかは疑問です。そこが広告代理店も含めてですけど、このオリンピックのボランティアというのを、真剣に考えていないのではないかという気にさせられます。

大事なことは、ボランティアをすることで何が得られるのかということが、実はあまり言語化されていないように思います。これは長野大会でも同じようなことが言われてきました。今回、有識者会議というのが、ではやりがい強調すれば、ボランティアをもっとやってくれるのではないかと行って火に油を注いだわけです。これが「やりがい搾取」という議論につながってしまったわけなのですが、ボランティアもいろいろな経験になると思いますし、楽しいイベントだと思います。私自身はそれほど批判的ではないのですが、なんとなく世の中的にはボランティアが悪者にされて、たたかれているイメージがあるのは深刻な問題だなと思います。そう言いつつ、私も火に油を注いでいるようなところもあります。

今述べてきたことを一言でまとめると、こんな感じになります。例えば、商業主義批判とか大学の対応についてはシステムが引き起こす問題なのですが、自分がやりがいを持ってやっているボランティアが、結果的に誰かのためとか、商業主義のお金

儲けのためになっているのではないかと、何かに取り込まれてしまっているように感じられることから今回のボランティア問題は起きています。これは仁平さんの言葉を借りると「動員モデル」ということになると思います。このような問題と、ボランティアはやりがいがあるのだという言説に付きまとう複雑な問題系があります。それは、偽善ではないのかという問いや、ボランティアを通したやりがいが、誰かの犠牲をもとにして成り立っているのではないかと、つまり、誰かが自立をしなければならぬものをわざわざ手助けして、妨害しているのではないかと、といったような、自分に向けられた揺れがあると思うわけです。

スポーツに特化したボランティア、スポーツ・ボランティアというのは、このような否定的なモデルで今まで議論されてこなかったのではないかと思います。スポーツ・ボランティアは良いものだずっと論じられてきたので、今回スポーツに関わる人達は非常に戸惑っていると思います。つまり、自分たちが善意で、良いことをしようと思っていることに対して、なぜこれほど批判をされているのかがわからなくなっているのではないのでしょうか。これが浜田さんのところで報告があると思うのですが、スポーツに関係するボランティアの特殊性に関わる問題ではないかと思い、後ほど議論したいと思っています。

これらが一緒くたにされて語られてい

ること、つまりは、ボランティアのシステムとか課題をめぐる問題と、ボランティアの本質とかボランティアのやりがいなどをめぐる議論が、本当は別々に議論しなければならないのですが、混在化してよくわからないものになっているのが現状だろうと思います。

ボランティアとは何か

そもそもボランティアという言葉自体、年代を見ていくと全然違ったものとして語られてしまうということを仁平さんが研究で明らかにされています（仁平¹²⁾）。ボランティア、奉仕、地域貢献、あるいは有償とか無償という言葉などを含めてですけれども、こういった言葉が、その時々によって使われ方が異なっているというのが、ボランティアという言葉の難しさだということです。例えば、1990年代にそれが大きく変わるとされるのですが、先ほども申し上げた通り、他者のために自分を犠牲にして、ギフトとして与えるものという、慈善的なボランティアの奉仕がボランティアの一つの定義として使われていたようなのですが、阪神淡路大震災の震災ボランティアや、長野オリンピックのオリンピックボランティアなどが出てきたことによって変わってきました。それは例えば、自分が楽しいからやる、それをやったことで勇気づけられるからやるといったように、交換的な概念が、どうもこのボランティアの概念に入ってきたようなのです。意

味論的な変化ということで仁平さんは整理をされていますが、この交換を求める活動としての〈互酬的〉ボランティアへと変容しているのが、今のボランティアのあり方だろうということです。

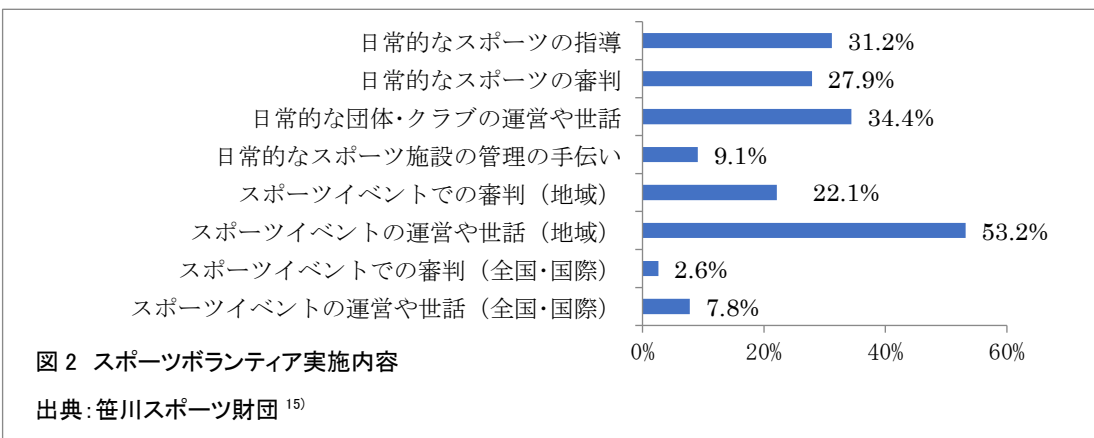
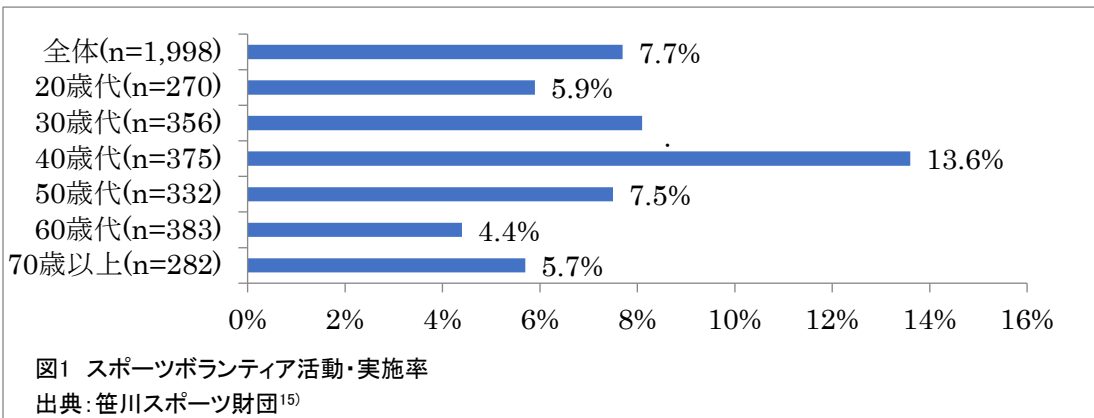
〈互酬的〉ボランティアというとピンとこないと思いますが、これはマラソンをイメージしていただくとわかりやすいと思います。奈良でも奈良マラソンが行われています。そこでボランティアに入った方々が、走っているランナーを見ていると勇気づけられ、そこで元気をもらって帰る、あるいは楽しかったというコメントを發します。それは今までのボランティア、先ほど申し上げた、自分が何かを犠牲にして人のために尽くすというものと違って、何かをもらっているわけですね。これがボランティアのイメージがちょっと違ったものに変わってきているということなのです。そして、マラソンのボランティアの事例がまさしく、スポーツ・ボランティアと呼ばれるものの特殊性に大変適合的な事例であると思います。このことは浜田さんに議論していただけたと思います。

スポーツ・ボランティアの定義にはいくつかありまして、有名なのは笹川スポーツ財団が掲げているものです。「報酬を目的としない、自分の能力・技術・時間を提供する、地域社会や個人に対するスポーツ推進のための活動」であるというものです。スポーツを介したボランティアはこのようなものだという定義です。この定義に当

てはまるものがどれほどあるのか、量的調査が行われていまして、ボランティア活動の実施率などが出されているわけです。図表で見ていただくとわかるとおり、スポーツは40代とか30代の方、すなわち、比較的若い世代の方々がボランティアをしている、そういう領域になります（笹川スポーツ財団¹⁵⁾）。一般的な、福祉のボランティアとかですと、もう少し高齢の、シニア層の方が中心になっていると思いますが、これがスポーツの特徴です（図1）。

なぜこのような特徴を持つのかと言うと、次の図表「スポーツボランティア実施内容」（図2）にあるとおり、スポーツイベ

ントの運営や世話、地域で行われるイベント、例えば、奈良マラソンや大阪マラソンもそうですけれど、自分から出ていくことも含めて、そのようなものに駆り出されることをボランティアとしてカウントしていくと、このような数字になるというのがこのデータです。ただ、笹川財団のスポーツ・ボランティアにおける定義はわかりやすいのですが、この定義にとどまっていると見えないものもいくつかあると思います。その大きなものの一つとしては、スポーツ・ボランティアと名指されるものは昔からあるのですが、最近特にマラソン大会が隆盛する中で出てきている問題です。



多くの地域が人びとによる地域づくりとか、地域活性化のために、マラソンのようなイベントを実施しています。その手伝いとしてボランティアを必要とする、イベント型のマラソン大会というのは非常に多くなっています。このような社会に要請されるようになったボランティアが、どのように誕生してきたのかをきちんと考えておく必要があると思いますが、十分に考えられていないと思います。

長野オリンピックでのボランティア

次に長野オリンピックの検証をしてみたいと思います。そのことが東京大会に直接使えるかと言うとそうでもなくて、やはり地方のローカルな大会と都市型の大きい大会とでは規模も違うので、一概には比較できないのですが、長野の事例から考えられることもあるのでいくつかご紹介したいと思います。

長野オリンピックでは Team'98 と呼ばれるボランティア組織がつけられました。ユニバーシアードで市民ボランティアが行われたことがきっかけだと言われていますが、これは国内的な流れです。オリンピックで言いますと、その4年前に開催されたリレハンメル大会で、Team'94 というボランティア団体が結成されました。公式報告書などを読みますと、リレハンメル自体が小さな町だったため、外部からボランティアを沢山受け入れると宿泊がどうしても足りなくなってしまうので、基本的に

は地元の人を優先して募集しました。それから地元意識の醸成が強く意識され、これはボランティアの離脱防止のためということでもあるのですが、ボランティアをしてもらったことで、地元に着着を感じて活動してもらう、そのような人材になってもらおうということが意識されていました。

これを長野大会は引き継いで、Team'98 という名称で結成されました。仁平さんのお話にもありましたが、ボランティアの存在がこの長野大会では招致の売りとして出てきます。ここから本格的に、ボランティアのスポーツイベントへの参入が始まるわけなのですが、長野大会にまつわる数字をいくつか確認したいと思います。

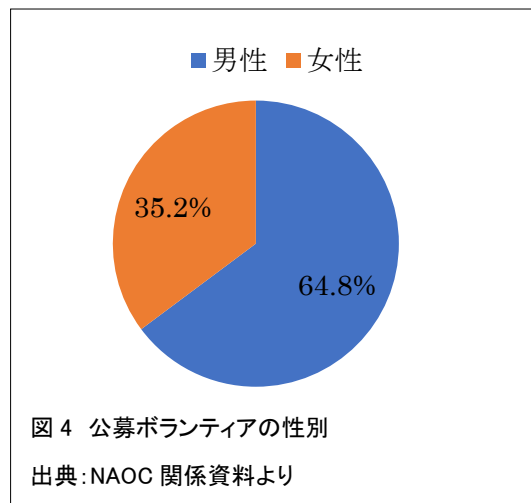
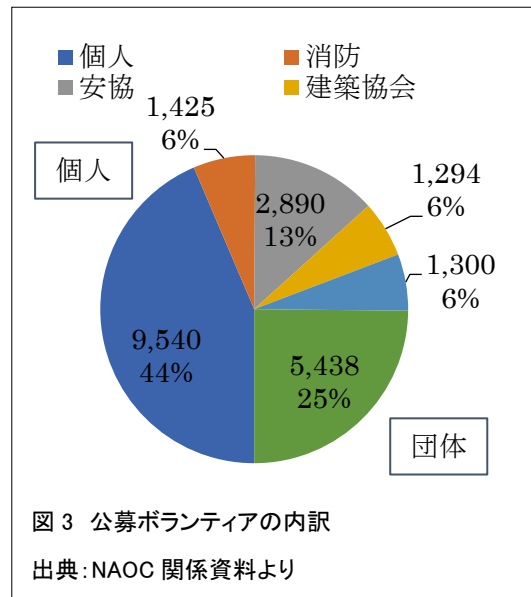
運営ボランティアとしては3万2,579人が会場整備をしたり、警備、輸送を行ったりしました。それから文化交流のボランティアをした人が延べ1万5,489人です。その内訳を図表に示したのがこちらです(図3)。支援ボランティアといって、市町村職員の人たちや企業の人たちが、動員型のボランティアとして行かれたのが33%くらいで、公募で純粋に応募してきた方が67%という数字です。その67%の人も個人の資格で応募してきた方は44%で、それ以外は何らかのボランティア団体に参加をしている方ですとか、あるいは消防団や交通安全協会、建築協会など、そういった形でボランティアとして参加してきたことがわかります。長野大会において、純粋に個人の資格で、初めてボランティアに

応募してきた人というのは、実はそれほど多くなかったと言えるかもしれません。

性別を見たのがこの図です(図4)。女性が多いようなイメージがありますが、男性のボランティアが多く(64.8%)、年代では若い層も含まれていて(例えば、20歳代27.2%、30歳代23.4%)、年代的にはバランスのいいボランティアだったことがわかります(図5)。ボランティアでどのような仕事があったかという点、一番多いのが運転手(31.0%)で、例えば企業から呼ばれてきてIOCの要職の人たちを会場まで送るとか、そのような仕事をしていたようです。あとは駐車場の整理(16.0%)や警備(9.8%)、入場券もぎり(4.9%)などのいろいろな雑務をやるというようなボランティアがありました(図6)。

次に見ていただいているのは、私たちの長野オリンピック調査チームが、大会10年後にオリンピックの遺産を評価してもらったアンケート調査の結果です。ボランティアについて直接聞いたものではありませんが、ボランティアを含む活動をどのように評価するかという問いに対して、「大いに評価する」、「ある程度評価する」という人たちを合わせると、64.5%くらいの方がこのような活動を評価していることがわかります(図7)。

長野大会の参加資格はどうなっていたのかというと、中学生以上であれば参加できました。東京大会とはほとんどの条件が

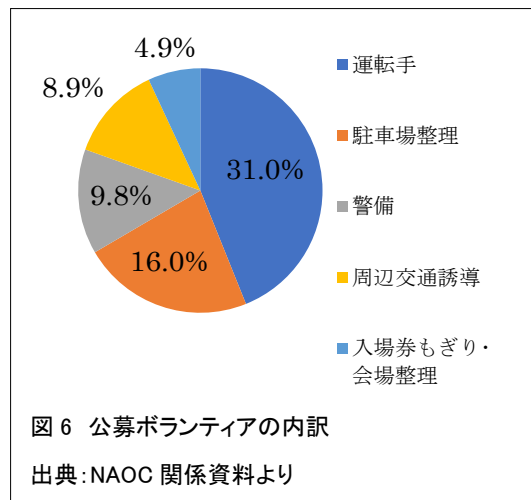
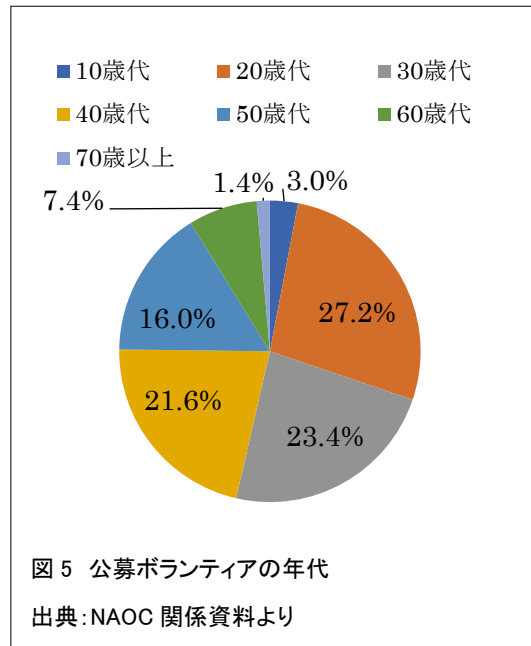


似通っていて、現地までの往復旅費、事前研修は自己負担です。ただ、駅から会場までのシャトルバスが運行されていたようです。長野大会が特異だったのは、温泉のある地域で開催されたので、旅館や民宿が沢山ありました。そこである程度の人数を吸収できたので、外部から来た人たちはそこに宿泊をするというチャンスがありま

した。聞いてみると、そこの仲間と夜通し飲んだとか、そこで交流を深めてボランティア組織が結成されやすくなったのだとおっしゃる方もおられます。

8日以上参加したボランティアにはユニフォームが支給されていて、このほかに参加賞が出ました。IOCからの参加証明書やサンクスピン、Team'98 記念ピンなどです。あるいは会場によっては入場券をもらって競技を見られた方もいらっしゃるようです。これがオリンピック終了後にどうなったかという点、無形の遺産としてボランティア組織が作られたと言われています。ここでは 2 つの大きな組織をご紹介します。

一つは「エムウェーブ友の会」と言いまして、エムウェーブで仕事をした方々が、大会終了後に約 200 人の会員を集めて結成したものです。仕事内容はさまざまで、会場内に入っていた方もいますし、外でシャトルバスの運搬整理だけをやった方などもいて、ただ単にバスの仕事だけ手伝ってお弁当を食べて帰る仕事だったという方もいます。こういう人たちが集まって友の会を結成しました。1998 年当時、E-mail もそれほど普及していませんし、今のようにはスマートフォンや LINE などないですから、お互いを把握することが難しかったと思います。公式的な名簿を使ったわけではなく、個人がお互いに交換をした電話番号や住所など、そういったものを集約して名簿を作っていたということです。です



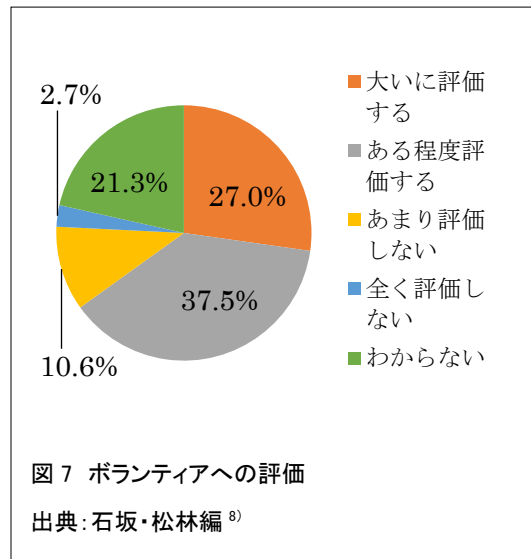
から、結成時は非常に苦勞してできあがった組織だと言えると思います。

事務所がエムウェーブ内に置かれていて、会報も出しています。今年はちょうど 20 周年を迎えたところですが、現在も「エムウェーブ友の会」はエムウェーブで行われている国内・国際大会に対する支援をし

ています。例えば駐車場の整備やチケットもぎりなど、基本的に競技のサポートを中心に継続して活動を行っています。この写真は毎年 4 月に行われる長野マラソンの様子ですが、緑のジャンパーを着ている人が友の会の方たちです。マラソン大会では、エイドと呼ばれる飲食の提供をサポートすることにも関わっています。

もう一つが白馬の Team'98 です。これは白馬村でボランティアをした人たちの団体で、会長さんが民宿をされていた関係もあり、ボランティア交流会を開催したことがきっかけとなり成立しました。村が財政的に厳しくなって開催を断念した競技大会を、有志を集めて支援し、開催にこぎ着けたという実績を持っています。このような競技支援もしているのですが、白馬村のケースが面白いところは、環境保全活動としての「グリーンパトロール」や清掃活動、里山整備などを行っていることです。競技施設や競技のサポートを超えて、地域のサポート活動をやっていることが興味深いです。

ただ、20 年経った現在、実際に活動されている方が減ってきているようで、今年最後の総会になるのではないかというように、岐路に立たされているようです。これ（写真）は白馬の青鬼集落というところなのですが、非常にきれいな棚田や昔ながらの山村集落があります。このような風景を自分たちの力で保存していこうという活動が、オリンピックのボランティアを契機



に行われました。

オリンピックボランティアに携わる皆さんに、ボランティアの何が魅力なのかと聞くと、典型的に返ってくるコメントがあります。一つはオリンピックというのは一生に一度あるかどうかの体験なので、かけがえのない体験なのということです。これは皆さんがおっしゃいます。他には、オリンピックの場を共有したという語りです。例えば、シャトルバスの運行を手伝ったり、ドライバーをしたりといったように、内容はいろいろ違うのだと思うのですが、オリンピックを手伝った場の記憶が、集合的な記憶として皆さんの中に共有されているということです。それから、いくつかのボランティア組織は同窓会的なものとして運営されていますので、現在でも居場所として機能しているともおっしゃいます。

あとは異世代、異職種、異なった地域の

方々が集まっていますので、そのような中で学びになっている、自分が成長出来る場であるという語りも聞かれます。あるいは、選手と偶然に出会ったり、金メダルを取った会場、その場を一緒にシェアできたとか、役割上本来は良くないのでしょうかけれども、選手がサインをしてくれたりといったように、その場に出くわした喜びみたいなものを、ミーハーですが、と言って語る方もおられます。ただこの語りは個人に限定した語りでしかなく、それが地域の中でどのようなボランティア組織になっているのかということまで意識して語ってくださる方はあまりおられません。そこが東京大会に向けてもポイントになるのではないかと思います。

このようなオリンピックにおけるボランティアがマラソンやスポーツに拡張されていくとどうなるのでしょうか。つまりオリンピックのボランティアはどこに接合、接続していくかという問題です。先ほど見たように、最初は団体から派遣されてボランティアに来たという人も多いのですが、逆にオリンピックを経験することで、自分が所属していく組織を新たに作っていったり、あるいは、自分の居住している地域のボランティアにどんどん関わっていったりする方が案外多いようです。これはボランティアそのものに魅力を感じた人たちが、多くなったということだと思います。また、これはただ単に競技サポートをしたボランティアを超えていて、地域活動のサ

ポートに開かれています。

地域づくりや地域の活性化として、近年マラソン大会が増えていることを述べました。マラソンで地域づくりというのは簡単ではないのですが、マラソン大会をすることでどのような変化が見られるでしょうか。あるいは今、70年代以降に盛んに言われたコミュニティの再創造みたいなことを、マラソンやそのボランティアを通じてやろうということが掛け声として出てきています。スポーツにおけるボランティアはこういったものに接合、接続され始めているのが現状だと思っています。ボランティアは無償の活動でなければならない、あるいは、動員型であってはならないなどと批判されるのですが、先ほども申し上げた〈互酬的〉関係、すなわち、ボランティアをすることが自分の地域や、人のためになるばかりではなく、そこから自分が勇気をもらったり、楽しんだり、あるいは居場所になったりするという交換関係が、ボランティア自体に成立し始めているということです。

まとめにかえて、最後2枚のシートで話を終わります。オリンピックが商業主義的なイベントであるということは疑いないので、商業主義批判をする人たちにとっては、ボランティアに行くということはそれの片棒を担ぐということになるため、批判をされ始めているようです。実際にやっている方たちは、固有の価値を持つムーブメントとしてのオリンピックを信じていた

り、あるいは、ボランティアのやりがいそのもののために行っていたりするため、商業主義のイベントを支えるという意識でやっているわけではありません。商業主義とやりがい、この両者がどうしても共犯関係を結んでしまうということの難しさをどのように考えるかということが重要です。

長野大会から見えてきたオリンピックでのボランティアというのは、地域におけるボランティアと密接な関係を持っていくということでした。ですから東京大会も、「やりがい搾取」という議論で終わってしまうのではなく、そこでボランティアをした人びとが、自分の地域に散っていくわけですので、そういう人たちをどのように位置付けて活用していけるのかということ、を、もう少し考える必要があると思います。あるいは、そのボランティア経験の言語化をどんどんしていく必要があると思います。ある一部の人たちに、楽しかった経験として閉じられていることに、ボランティアが広がりを持たない原因があるのではないかと思います。

現在いくつかの東京の地域で調査をしていますけれども、東京大会で生まれたボランティアをどのように活用していくのかという問いを向けています。これに対して、明確な答えを持っている地域にはほとんど出会えていません。なんとなくそういうものが自分たちの地域に役に立つのだらうという、漠然とした感覚はあるのですけ

れども、どれをどのように役立てるのか、仕組みを作ろうというところまで議論がほとんど進んでいない状況です。恐らく東京大会を終えたときに、ボランティアが生まれ、楽しかった、やりがいがあった人たちは大量に生み出されたけれども、一体ボランティアとは何だったのだろうかということが、また同じような議論として繰り返されるのではないかということを懸念しています。

最後にスポーツのボランティアの特殊性についてですが、このあと浜田さんがお話をしてくださると思うのですが、仁平さんが調べられてきた福祉領域などのボランティアで語られてきたものと、スポーツで語られているボランティアには少しズレがあるように思います。多くの人はそれを善なるものとして信じていますし、そこで動員と言われても別に動員でもいいと思っている人たちが、スポーツ・ボランティアを支えているように思います。スポーツにおけるボランティアを、福祉などにおけるボランティアの用語とどのように違うものとして認識するか、つまり、オリンピックがボランティアという言葉に一体何を付け加えられるかということについて、これから少し議論していきたいと思っています。以上です。ありがとうございました。

4. トライアスロン大会におけるボランティアとは

【浜田】 京都産業大学の浜田と申します。よろしくお願いします。私の専門はボランティアでもなければ、オリンピックでもありません。もうすでにお2人の先生からお話があった後で、何をしゃべるのかという感じがしてしまいます。その中で今回私がお話したいのは、オリンピックとは全く異質のスポーツ、そしてそこにいるボランティアと呼ばれる人たちのことです。その人たちの活動のあり方を通じて、オリンピックのボランティアについて何か言えることがあるのではないか、スポーツ・ボランティアについて問い直すことができるのではないかと考えました。そのために、今回はある事例をご紹介しますと思っています。

全日本トライアスロン皆生大会

その事例とはトライアスロン、水泳（スイム）、自転車（バイク）、ランニング（ラン）の3つの種目を連続して行う持久競技です。結構新しいスポーツで、日本では1980年代に地域おこしのスポーツイベントとして、あるいはマラソンなどと同じく余暇のスポーツ活動の一環、いわゆる市民スポーツとして普及していった経緯があります。今日の事例は皆生、「かいけ」と読みます。皆生（全日本トライアスロン皆生大会）という鳥取県で行われている大会です。皆生は日本で初めて行われたトライアスロンの大会です。1981年から始まった

のでちょうど私と同じ年ですね。この大会はトライアスロンの中でも距離が長いロング（ロング・ディスタンス：皆生の場合はスイム 3km、バイク 140km、ラン 42.195km で構成）というカテゴリーに該当します。ロングがトライアスロンの原型で、オリンピックでやっているのはそれを短くしたものです。皆生には個人 940 名、リレー 60 組の選手が出場します。ちなみにリレーとは 1 人 1 種目ずつを 3 人でつなぐ、ということです。そしてこの大会にはボランティアと呼ばれる人たちが今年は公称で約 4,400 人参加しています。前日に開会式、翌日に閉会式が行われますが、競技自体は 1 日しかないのです。そう考えると結構な人数が参加していると言えるかもしれません。

これが皆生の様子です（写真を示す）。海を泳いで、自転車の後ろに見えているのは大山です。そして走って、最後は仲間や友人や家族、応援してくれた人たちと一緒にゴールする場面も多く見られます。こういうのもマラソンやトライアスロンの市民スポーツとしての大きな魅力なのかなと



思います。

そのような大会にボランティアと呼ばれる人たちがいます(写真を示す)。この緑色の T シャツを着ている人たちがボランティアです。例えば受付、トライアスロンでは身体にレースナンバーを書くんですけど、ボディーマーキングを手伝ってあげています。そのほかにも飲み物や食べ物を選手に支給したり、コース上で選手の誘導をしたり、ゴールした選手にタオルをかけて迎えてあげたりします。こういったことをボランティアは大会当日にしています。

次にこちらの大会組織図(皆生トライアスロン協会¹⁰⁾ p.3)について、あまり詳細は追えませんけども、この中でボランティアという今日の話に関わる部署は2つです。1つは各地区にある支部です。すごく広域にわたる大会なので、それぞれの支部がボランティアを集めています。総数を4,000人とする、そのうちの半分くらいが支部を介したボランティアです。もう1つがボランティア部です。ここでもう半分の2,000人くらいを集めています。実はこういう仕組みだということを最近教えてもらって、お話をうかがったボランティア部の方(Bさん)も、各支部がどうやって人を集めているのか、どういう内訳になっているのかはわからないとのことでした。詳細はこれからまた調べていかなければならないですけども、基本的にはこういう割合になっているそうです。

「お願い」と「熱意」

ボランティア部を運営している、ボランティア部の部長を出しているのが、中央会(鳥取県西部中小企業青年中央会)という組織です。中央会とは例えば地元企業の後継者や地域の自営業者などで、25歳から45歳までの方が任意で参加する会です。この人たちが皆生という大会の大事なところに関わっていて、ボランティア部、マラソン部、あと一部のエイドステーション(選手が競技中に飲食物の提供や処置を受けられる場所)の運営をしているんですが、今年のボランティア部長をされたBさんによると、それらの活動への参加は「強制的」、「義務的」とのことでした。楽しんでやっている人もいれば、仕方なくやっている人もいていろいろなんです。大会当日は9割以上の会員が参加する会の年間行事になっているそうです。またボランティア部が集めているおよそ2,000人のボランティアのうち、自分から応募してくる人は300人くらいしかいません。大半は「お願い」による参加者です。これを動員とイコールとしていいのかはちょっとわからないですけども、例えば中学校や高校、企業やそのほかの団体に「今年もお願いします」という形で依頼をして参加してもらっています。毎年の恒例でやってくれるところもあれば、「ちょっと今年は・・・」みたいなところもあるそうです。このようにして、ボランティア部では大会に必要な人数を集めています。

こういうところを見たときに考えるのは、「ボランティアってなんだろう」ということです。中央会の人たちは無償でやっている、先ほどの組織図の中にいる人たちもほとんどは無償でやっているはずなのでボランティアとも考えられるんですけど、この人たちはボランティアとは呼ばれません。またボランティアと呼ばれる人たちについても、自発的という意味からすればその多くはボランティアとは言えないんじゃないかとBさんは話していました。

第1回からずっと大会運営に関わられているAさんにお話をうかがったときに、「皆生らしさとはなんですか」という質問をしました。よく聞かれることなんだろうんですが、皆生らしさとして3つの日本一というのがあって、まず1つは歴史だと。日本で最初の大会であるという歴史の長さ。もう1つはコースのきつさ。7月半ばの暑い中で大山を上る坂道があったりして、すごくきついコースというのが1つ。最後にもう1つあって、それがボランティアだと。ボランティアの「熱意」というのは、他の有名な大会と比べても日本一だと。こうした自負について、実際に活動する中で熱意が現れるということはたしかにあると思うんですけど、「お願い」されて参加している人が大半なのに日本一と言われるくらい「熱意」があるとはどういうことなのか。それほど一生懸命やっているボランティアとはどんな人たちなのかということを見ていきたいと思います。

ボランティアへの思い

大きく分けると、皆生にはボランティアに対してこうしてほしいという思いが2つあります。1つ目は支えてほしい、長年ずっと続いてきた大会を支えて守ってほしいということです。関連資料（「ボランティアの任務と心得（第38回大会）」）にはいろんなことが書いてあるんですけど、その中にボランティアのホスピタリティの高さが大会の大きな誇りだということが書かれています。これは誰に向けたホスピタリティなのかというと、選手だと思うんです。例えばコースポイントボランティア、先ほどの写真にもあった選手を誘導する役割ですけど、誘導に加えて選手を応援しましょうということが任務として書いてあります。大会のスタッフが直接選手を応援するスポーツというのはよく考えたら珍しいかなと思うんですけど、それが任務に含まれている。つまりボランティアと選手の関係は皆生という大会においてすごく重要な位置づけにある。そしてその関係の中に、ずっと続いてきた伝統みたいなものがあるというふうに言えるかと思います。

2つ目は楽しんでほしいということです。やりがいとも言え換えられるかもしれませんが。これは一般のボランティア、つまり自分で応募してくるボランティアを募集する文書（「第38回全日本トライアスロン皆生大会ボランティアご協力のお願い」）

からの引用ですけど、「今年も『感動』そして『楽しさ』のふたつをスローガンにしていきたいと思っております」、つまり楽しいからぜひ参加してくださいということが書いてあります。次にこちらは B さんの語りなんですけども、選手から「ありがとう」って言われることで、ボランティアの人もそれですごく楽しい経験をしていますよということ、ボランティアと選手が一体になってつくり上げる大会だから一生懸命頑張ってほしいし楽しんでほしいということを、ボランティアの説明会では話されるそうです。したがって選手とボランティアの関係の中にある伝統には楽しさが伴っているんだということになります。選手や大会を支えるということと、その行為が楽しいということがどういう関係にあるのか。実際に見ていただいた方が早いと思うので、一応少し解説をしながら、どういう場面なのかをお話ししながら、大会の映像を見ていきたいと思います。

皆生のボランティアの実際

＜映像を見ながら＞

これはバイク競技中に水を渡しているところですが、次々に選手が来るので、なくなった分をどんどん補充しています。今度はスポーツドリンクが渡されました。否応なく一生懸命対応しないと回らないというような状況です。

こちらの場面は少しゆったりしていて、選手からほしいと言ったわけじゃないの

に、ボランティアが自分から食べ物を渡しています。「ありがとう」という選手に「美味しい？」とボランティアが聞くと「美味しい」って言うので、「スイカもどうぞ」と勧めて選手に差し出す。このような選手への働きかけが皆生には結構あります。

また子どもも大会を手伝っています。これは選手に水をかけてあげているところです。この子が、ちょっと聞こえたか分からないですけど、今「楽しい」って言っていた。単純に、人に水をかけるという普通はあまりしないことを、単純に子どもは楽しんでます。

次にこれはランニングのコースで選手に水をかけている場面です。すると水が飛び散って笑いが起きるんですね。「ありがとう」って言う選手にボランティアの中学生が気づかなくて、「目を合わせてちゃんと応えんか」と先生に突っ込まれていて、それでまた笑いが起きる。そしてこの先生も一生懸命に、中学生と一緒に任務についている。

今度は姿のまだ小さいうちから、誘導のボランティアがずっと選手に拍手と声援を送っています。応援は任務って書いてあったんですけど、そういう任務の枠を超えるぐらい熱心に声援を送り続けて、また次の選手が来たらその選手に手を振っています。

こちらはとてもトライアスロンをしているようには見えないかもしれませんが、周りは 3 連休の中日の夜の街中なんですけ

ど、選手が「ありがとう」と言って、ボランティアも笑顔で応えている。日常の中に非日常的なやりとりが生じています。

次は最後もうあと 1km くらいのところなんですけど、すごく苦しそうな選手に「大丈夫か」とボランティアが声をかける。選手の頑張りや苦しさに共感して、自然に働きかけが起こります。

こちらのたくさんの応援の人たちはずっとある選手を待っていた。そしてその選手がやってきました。するとスポンジで選手に水をかけてあげていたボランティアが、その役割をスポンジごと応援者に渡してしまう。こんなことしていいのかと思わないでもないですけど、みんなで一緒に楽しんでしまおうということかなと思います。

こうしてスタートから 14 時間半という制限時間を迎えます。これは残りあと 3 秒というところで間に合って完走できた場面です。自分はボランティアだとか応援者だとか関係なく、こういうのを選手と一体になる、みんなが一体の大会と言うんだと思うんですけど、本当に力のこもった応援をして、もう周りの人なんか飛び跳ねちゃって、すごい拍手して、「いけー」と声援を送っています。本当に選手と一緒に自分も走っているような感覚で応援しているように見えます。

〈自発的〉なボランティア

今見ていただいたそれぞれの場面では、

支えると楽しむということが両立しているように思われます。皆生のボランティアは、ただ与えられた役割を果たしているとか、しないといけない作業をこなしているのではなく〈自発的〉に活動しているんじゃないかということが言いたくて、映像を見ていただきました。所定の役割や作業に枠づけられたり、決められたとおりにしたりするのではなくて、選手との関係において〈自発的〉になる、大会の実際の活動のなかで〈自発的〉になるという意味で、山括弧を付けて区別しています。〈自発的〉になるとは、より具体的に言えば、例えば自分から働きかける、なにか即興が起きる、一生懸命応援する、楽しむといった類の事柄を指しています。

なぜ〈自発的〉になるのかということについて、ちょっと古いボランティアの体験談（皆生トライアスロン協会⁹⁾ p.24）なんですけど、こういったことが書いてあります。先ほどの次々に来る選手に水を渡す、すると水がなくなってきた、という場면을想像していただいたらいいのですが、もたもたしていたらいけないくらい選手のパワーに圧倒されてしまうと。でも、そんな中で一生懸命になれる、緊張感を持って活動できるということが、振り返ったら楽しいと思えるのだとされています。

2 つ目には、皆生は日常では決して感じることはできないことを山のように感じさせてくれるとあります。つまり普通の休みの日曜日とは違う非日常的な感覚にな

る。やっぱり限界に近づいて、あんなふらふらになりながら、すごくしんどそうに頑張っている人を間近に見ると、単純に応援したくなる。自然にそういう気持ちになる。そうやって、映像にあったみたいに応援したり、「大丈夫か」と声をかけたり、というようなことが起きるんじゃないかと思います。

3つ目ですが、選手が「ありがとう」と言ってくれる。すると支える側なんだけど、自分が支えられているような気持ちになる。こちらが励まされて心がなごむとあります。この最後の一節が大事なと思うんですけど、競技志向に走ることなく、いつまでもこのまま、皆生という大会は今のままの姿であってほしいということが書いてあります。多分、20年ちょっと経った今も皆生はあまり変わってないと思うんですけど、この体験談が書かれた90年代半ばというのは、トライアスロンがオリンピック種目に採用されることが決まって、国内の競技団体が一元化して、日本のトライアスロンの競技化が進展した時代です。その中で皆生は遅れた大会と言われるようになっていくんですが、それでもこのままであってほしいと書かれています。

皆生が残しているもの

競技志向じゃない大会ということのルーツは第1回大会にあって、これは最初の大会の新聞記事（朝日新聞、1981年8月21日付夕刊、3）なんですけど、見出しに

は「のん気で楽しい鉄人レース」と書いてある。つまりすごく過酷で、自分がどこまでできるのかという強さを試すスポーツだと思われていたのに、実際は少し違っていたんです。ここに優勝した人のコメントがあって、皆生にあったのはふれあいだったと書かれています。またドラマのないドラマとも書いてあるんですが、第1回大会で優勝した人は実は2人いて、手をつないで並んでゴールしてしまった。こういうあり得ない、競争とか強さみたいなものを越えたところのふれあいが皆生にはあった。また給食というのは今のエイドステーションのことで、そこでのふれあいもあった。それらを通じて今の日本社会にはないものを見つけたような感じがしたんだと、この優勝した人の1人は語っています。

そうしたふれあいは今もあって（写真を示す）、例えばこれは家の前がコースなので庭から選手にシャワーをかけてあげているところです。こちらは看板を持って、「あと5キロだよ」とか、「この先危ないから気をつけて」みたいなことを選手に教えてあげています。こちらはビニールのプールが置いてあって、選手がその中に浸かっています。そして私設エイドと言いますが、非公式に飲み物とか食べ物を選手に提供するというも行われています。皆生が面白いのは、この人は審判なんですけど、選手の横で審判も私設エイドで飲み物を飲んでます。第三者の助力ということで厳密にはルールに違反しているとも捉

えられるんですけど、一緒に飲んでしまっている。こういうゆるさと言ったら変かもしれませんが、皆生には第1回から残っているもの、つまり競技性の不徹底さやイレギュラーなものを認めるようなところがあります。黙認しているというか、曖昧なところがあって、そういう大会だから先ほどのようにボランティアがスポンジを応援者に渡したりとか、一緒になって応援したりとかしてもいいということになります。例えばオリンピックのマラソンで観客に水を渡させたり、コースの監視をしているのを忘れて応援していたりしていたらおそらく怒られると思うんですけど、そういうことができる。またそこでの選手とのやりとり、「ありがとう」と言ってもらえるようなやりとりというのは、ボランティアの人にとって職務上の作業的なやりとりとは異なるかけがえのない体験になっています。「一期一会」(<http://www.kaiketriathlon.com/hitori.htm>を参照)と皆生では呼んでいるんですけど、〈自発的〉にボランティアをすることが人との出会いとか、かけがえのない体験みたいなものにつながりうる。だからたとえ最初のきっかけは「お願い」であっても実際にやってみて「案外面白かったね」となってくれたら、次は自分から申し込んでくれる可能性も生まれてくるのではないかとBさんは話しておられました。

スポーツ・ボランティアとは



石坂先生のお話にあったスポーツ・ボランティアの特殊性、ということで最後にまとめたいと思います。端的にはスポーツ・ボランティアは一緒にスポーツする存在、スポーツとわざわざつけるということは、一緒にスポーツすればいいんじゃないかと私は考えています。仁平先生からお話があったように、例えば競技と無関係の交通整理とかトイレ掃除をさせているというのは、たしかに同じスポーツをやっている場所にはいるけど、そこでじゃあ一緒にスポーツをしているのか、つまり非日常的な空間を共有できているのかというと、おそらくそうではない。つまりスポーツの大会やイベントと一緒につくり上げると言ったときに、ボランティアがその中に入り込んでいるかどうかはすごく大事なんじゃないでしょうか。逆にそこから分断してしまうと、たちまちボランティアの、スポーツのなかにボランティアが入っていることの意味というのがよく分からなくなってくるのではないかと思います。ただし皆生みたいなやり方はおそらく近代スポーツ、オリンピックなんかではありえない、

認められないものじゃないかとも思うので、どうやってオリンピックに参加するボランティアの人たちにルールやロールやゴールを越えた(荒井²⁾ p.68 参照)〈自発的〉な活動を体験してもらうかを考えていく必要があるのではないかと考えています。以上で報告を終わります。ありがとうございました。

5. コメント・討議

【井上】 それでは後半を始めたいと思います。たぶんこれまでにお話いただいた中でもボランティアという言葉自体の定義がしにくくなってきて、あるいは、ある意味では色んな事実、日本では例えばあの神戸の震災ののちに災害に対するボランティアとかボランティアに対する定義、見方が変わってきている。この辺に関して少し捕捉をしていただきながら進めたいなと思っております。

【石坂】 ありがとうございました。仁平さんは『「ボランティア」の誕生と終焉ー〈贈与のパラドックス〉の知識社会学ー』(仁平¹²⁾)という分厚い本を書かれているので、学生の皆さんにはぜひ挑戦して読んでいただきたいなと思っています。仁平さん自身は福祉の領域などのボランティアを論じてこられた方で、98年の長野オリンピックぐらいから、ボランティアというのは、スポーツの方でも似たような状況が



見えるのではないかということを書かれています。長野オリンピックの調査をしていると、そこでのボランティアは仁平さんの書かれている〈互酬的〉なものにすごく近いように感じています。つまり人のために何かををするということを超えて、自分が勇気をもらったり、パワーをもらったりするというのがボランティアとして認識されてきていて、ボランティアとスポーツの関係がすごく近くなっていると思います。

それが今、マラソンブームで、いろいろな地域でマラソン大会が行われていますが、そこで動員がかけられつつも、地域おこしをしようというようなことが起きていて、ボランティアの文脈が広がっていると思うわけです。仁平さんがこれまで論じられてきたボランティア論の中では、このスポーツやオリンピックにみられるボランティアがどのように見えているのかと言うことをお伺いしたいのが一つです。

次に、皆さんも浜田先生の動画を見て、面白いと感じたと思いますが、ものすごい物語がありますよね。みんなが支えて一体

感がある。あれと似たようなことがオリンピックで起きるとして、動員だろうが何だろうがボランティアでそこに参加をして、一体感を得るといえるのはどうでしょうか。種類にもよるのでしょうか、そのような経験を取りあえずさせてしまうこと自体が、ボランティアの意義となり、そこで得られる圧倒的なパワーや物語を目にしたときに人びとはどのように感じていくのか、そしてそのことについて私たちがどのようなことを考えていかなければならないのか、ということですね。東京オリンピックのボランティアについては、これだけ批判がされていながらも、ボランティアをやりたい人たちはたくさんいるでしょうし、そこで得られるものには確かにポジティブなものがたくさんあると思うのです。ただ、そのことだけで本当に片付けてしまっていいのかということですね。その点を浜田先生にお聞きしたいと思います。

【仁平】 石坂先生のご指摘のとおりだと思います。ボランティア論の歴史を振り返ると、昔は、純粋贈与とでもいうべき、絶対的に無私の贈与がよいとされたこともありました。戦後しばらくは、個人の自発性が戦争へと動員された反省を踏まえて、単に個人の自発性を称揚するのではなく、それがどういった社会的帰結につながるのかという点が重要だと言われていました。つまりその活動が国家主義と、民主主

義のどちらにつながるのかといったマクロレベルの帰結も考えて評価しないといけないというわけです。それらが 70 年代以降、活動を通して得られる自分のリターンを強調する言説によって、とって代わられてきました。1970 年代以降、高齢化への対策として、福祉の担い手づくりや高齢者の生きがい対策のために、文部省や厚生省を中心に、ボランティア政策が展開されていきます。その文脈で、ボランティアというのは聖人君子や意識高い活動家がやるものではなくて、むしろ活動を通じて自己実現や成長、生きがいなどを得られるものなんだよという言説が生まれ、広がっていきます。これは、日本において馴染みのなかった「ボランティア」という言葉の敷居を低くすることにつながっていったと思います。

この受け手側のリターンを強調するという要素は、バブル期を経て 90 年代には互酬性という概念の下で、ボランティア論の中心に位置づくようになりました。長野オリンピックのボランティアの語りに互酬性的なものが目立ったということは、その意味で、大変納得できることです。そもそもおっしゃるように、スポーツ・ボランティア自体が、福祉という他者を前提にする活動よりも、自分の活動によって得られるものをポジティブに肯定するという意味論が浸透しやすいと思いますし、それが伝統的なボランティア言説と齟齬をきたす側面もあるかもしれません。それが今

日の論点であるスポーツ・ボランティアの特殊性とも絡んでくると思うんですけど、ここではちょっと別の角度から考えたいと思います。先程、マラソン大会のボランティアのお話がありましたが、その中に、「地域活性化のための」マラソン大会という言葉があって興味深かったです。つまり、そのマラソン大会とかスポーツ自体に公共性があるのか、それともスポーツ自体は価値中立的なもので、それが地域活性化という規範的な概念と結びついたときに、初めてそのイベント全体が公共的な意義を持ち、その無償労働も「ボランティア」と了解されやすくなるのかどっちなんでしょう。

例えば、メガロスっていう身体鍛えるジムがありますけども、そこが「ワークアウトの機械を拭くボランティアを募集します」って言ったら、それは従業員でやれとって炎上すると思います。もしスポーツ自体が規範的、公共的な意義を持つのであれば、メガロスがやろうがどこがやろうが、スポーツ・ボランティアとして成り立つと了解されると思うんですけど、そうはならない。地域活性化という規範的な概念のもとでマラソン大会が位置付けられることで、初めてそれがボランティアとして認識されるとしたら、実はそれは既存のボランティア論の範囲内にあって、その意味でスポーツ・ボランティアもすごく特殊というよりは、ボランティアの意味論にあるのかなという印象を受けました。

その点においては皆生も同様で、まず鳥取という地域で、非常に濃厚なソーシャルキャピタルに基づいて、おそらく地域活性化という意味付けもされた上で大会が行われているのだと思います。そのもとで、皆さんあれだけ楽しんで活動されている。でも、その活動が「ボランティア」としてみんなに認識されて、動員だろうが何であろうがとりあえずやることに意義があるということが共有されるのは、「地域のため」という公共的な意義づけがベースにあるからなのではないか。そう考えると東京オリンピックは何なのかやっぱよくわかりません。東京をこれ以上活性化させても意味ないですよ。これ以上一極集中しても良いことはありませんので、むしろ少し停滞させて、日本全国の色んな地域が活性化した方がむしろいいくらいかもしれない。このように考えると、やっぱりそこに疑問符が付く人が多いんじゃないかな。今ボランティア、オリンピックボランティアを批判している人も、例えば皆生のトライアスロンのボランティアをやりがい搾取って批判する人は少ないんじゃないかなと思うんです。あれは立派な地域おこし、地域活性化っていう文脈があるから。その意味での「物語」の働きが、今日とても気になったところです。

【浜田】 先ほど見ていただいたような体験をボランティアにしてもらうことから、どこに接続していくのかというお話だっ

たかと思います。まず皆生を主催している側からすると、たしかに地域活性化というのはあるんですけど、その前にまずとにかく大会を続けたいという意欲、意思があります。そして大会を知ってもらうこと、無関心をまず無くしていきたいと、ボランティア部長の B さんはおっしゃっていました。そのきっかけとしてああいう非日常的な面白い体験をしてもらうことで、大会に対するポジティブな意味づけを一人ひとりにしてもらう。そしてそれらが集まっていったときに、結果的に地域活性化という文脈にもつながっていくのかなと思います。

一方で、スポーツ・ボランティアの特殊性にも関わるかもしれないんですけど、ただ大会を続けるためだけとか、地域活性化のためにスポーツをしましょう、それでやりがいをみんなで得て、地域を盛り上げましょうというふうに最初から目的と手段をはっきりさせてしまうと、スポーツの中立的な部分、楽しさという部分を阻害してしまうんじゃないかなと思います。皆生は広範な地域をまたいでコースを構成しているのですが、実は交通規制をほとんどかけずに大会をやっています。だからランナーは歩行者で歩道しか走ってはいけなし、自転車は軽車両扱いでもし事故を起こしたら警察を呼ばないといけないということになっています。そんな中で大会をやるのはすごく非効率的なことで、例えば運営に関わった行政の担当者からは、距離を

短くすればいいんじゃないですかと言われたそうです。距離を短くして交通規制をかけられる範囲で大会をする、そうすればボランティアも減るし、時間も短くなるし、安全になるし、大会が続けやすくなっていいんじゃないですかということを言われたと。しかしずっと大会を運営してきた人からすると、お前みたいなやつは来るなというふうになった。効率とか制度とか仕組みといったことばかりが先行してしまうと、そもそもなぜこの大会をやっているのか、大会が持っている固有の価値やその源泉が見失われてしまうことになります。

なにかの目的のためにスポーツを使う、その使われるスポーツにボランティアが入っていったときに、やりがい搾取といったことがもしかしたら起きてしまうのかもしれない。またそこで行われているスポーツは果たしてスポーツになっているのか、スポーツの意義や価値を損なっていないのかなと思うと（荒井¹⁾ p.44 参照）、少し疑問があります。皆生そのものがちょっと特殊というか、何のためにとか、はっきり地域活性化などとは言わずに、ただ楽しんで大会を支えてくださいということだけをまずボランティアに伝えてやっているようなところがあります。結構曖昧な、微妙なバランスで続いている大会かなと思っています。

【井上】 シンポジストの先生方よろしいですか？ これまでのそのボランティアの

あり方、それからそれぞれにお話しいただいた公共性の問題、あるいは自由度のことも語られたかと思いますが、ここから先のボランティアが生み出す可能性に踏み込むのが難しい課題かなというふうに思いますが、ちょっとその辺のことで先生方どなたかお願いできませんか。

【仁平】 ボランティアが生み出す可能性ってというのはやっぱり何でしょうね、その僕は何か今日すごい目的とか物語ばっかにこだわっているみたいなんですけど、やっぱりどうせ自分の時間と労力を割くのであれば、そのイベントなりアクティビティ自体がその時の楽しさだけで終わるのではなくて、もうちょっとなにかより多くの人のためにプラスになってもらうことに繋げたいな。それだったら自分の時間割くのもいいなというふうに思っています。なので、その意味ではやっぱり目的をはっきりさせないと、ボランティアの可能性も発揮しようがないのかなというふうに思います。荻上チキというラジオのパーソナリティがいるんですけど、その人と話したときに、東京、オリンピックのボランティアは別にやりたくないけど、パラリンピックのボランティアだったらやりたいと言っていました。それは明確に障がい者の社会的参加というか社会的包摂につながるもので、それはもう非常に自分の時間を割く意義があるっていうのは分かるっていうことですね。あとオリンピックでも、例えば

今シリアが大変な状況ですけども、シリアが落ち着いて、多くの国の人々が落ち着いた生活に戻れ、そこでオリンピックを開くっていうことであれば、これは何をおいても参加したいとボランティアとして、その気持ちもすごくわかるんですよ。だからそういった形で、それはもうやっぱり、紛争地域によりやくオリンピックが開けるくらいまで平和を取り戻せたね、それをみんなで喜び合うために自分の力、可能性を割きたいなっていうボランティア。そういう形だったら、おそらく今回みたいな変な批判も起こりえないと思うんですけども、やっぱり原点に戻るんですが、そのそれは何につながっているのかっていうことがはっきりした上で初めて、自分の力とか可能性をそこに向けて発揮していけるというような議論の順番なんじゃないかなというふうに感じています。

【石坂】 ありがとうございます。私も同じようなことを考えていて、先日長野のエムウェーブ友の会の方々にお話を聞きたのですけれども、今ボランティアを東京でもやりたいと言うと、周りの人から怒られると言うのです。つまり商業主義的にやっている東京大会の片棒を担ぐのか、みたいなことを言われるようです。本人はそういう意識は全然なくて、長野大会でも自分は何となく人のためになると思ったし、それをやるのが楽しいと思ったから参加をして、東京大会もそういうつもりで参

加したいと思っているのだけれども、メディアも含めて全体の論調が批判的で、一体何をを目指しているのか分からない大会の片棒を担ぐのかと言われることに戸惑いを受けているようです。

今仁平さんが言われたように、東京大会が、このシンポジウムで何度も同じことを確認しているわけなのですが、どこに向かっていて、何を理念とするのか、まあオリンピック担当大臣自体が言えないので無いのだと思うのですけれども、そういうことを確認せずにやってしまっていて、ボランティアも募集してしまっている。一方で、ボランティアをしようと思う人たちは、それがオリンピックであるということ、すなわち、かけがえのない、たぶん一生に一度あるかないかのイベントであるということに、ボランティアの意義を見出ししています。

東京大会は何に向かっていくのかとか、どのような社会を目指して開催されるのかということです。例えば、これまで見てきたように、地方のマラソンでは地域を創るとか、活性化するというようなことが前提として行われているため、ボランティアも関わりやすいわけですが、東京大会ではそれが見えないので、どうしてもボランティア批判に向かってしまうのが現状かなと思います。それでは、どのような物語が紡いでいけるのかということですが、オリンピックはいらないと考えている人たちにとっては、そのような物語は逆にいらな

いわけですね。わざわざ作られた物語は、かえって受け入れがたいわけです。この状況を解決するのは難しいように思います。

【浜田】 自身の事例ばかりに結びつけて恐縮なんですけど、先ほども申し上げたように、皆生に関してはまずどうやって大会を続けていくかが重要になってきます。続けていく理由を正当化するような大きな物語ありきというわけではなく、主催側としてはとにかく続けていこうとしています。当然地域には迷惑に思っている人や全く関心のない人もたくさんいるんですが、基本的には今のやり方さえ保てれば、大会は地域で受け入れられて、続けていくことはできるだろうと思われま

す。そこでなぜ大会を続けていけるのかなと考え、今年、閉会式のときに紹介されていたのですが、ボランティアの中学生が地元のテレビに出演した際のエピソードが思い浮かびます。中学生なので、部活かクラスかなにかで先生に言われて参加したのだと思います。だからはじめはおそらくボランティアに参加する意味などはよくわかっていなかった。その中学生が参加した感想を聞かれて、まさか自分が「ありがとう」って言うとは思ってなかった。自分がやっていることで選手に「ありがとう」って言うとは思ってなかった。ただそれだけのことが嬉しくて、また来たいなって思って今年も参加したんだそうです。こうした思いを地域の人々が得られる

限りは、大会を続けていくということなんだと思います。

逆にもし大会がなくなると、地域におけるシンボルみたいなものがなくなってしまうわけです。大会が続いている限りは地域活性化のような大きな物語というのは先行して見えてはこないですけども、逆になくなったらどうなるんだろうって考えると、そのときに例えば地域の課題などから紡がれる物語が求められてくるのかもしれない。米子には皆生の開会式や閉会式の会場となっているビッグシップという施設があるんですけども、そこにあれだけの人が集まるイベントというのは、年間を通じてもそう多くはないそうです。それだけのイベントがなくなった時のことを考えると非常に怖い。まとめると、大会を行えている現状においては大きな物語の必要性はあまり問題にはされていない。一人ひとりの体験というのが生じる環境を保ち続けられさえすれば、そこにボランティアの価値というのも付いてきて、自然に物語にもつながっていくのではないかと思います。そして逆に大会がなくなったとき、継続が危うくなったときに、地域での大会やボランティアの価値とはなんだろうという形で、大会を正当化する物語について改めて考えることになるのではないかと思います。

【井上】 それでは、あまり時間が無いのですけれど、フロアの方から質問等を受け

たいと思います。

【フロア 1】 貴重なご発表ありがとうございました。2点ほどお伺いさせてください。まず仁平先生、すでにお話いただいたんですけども、パラのお話、少し出ました。先生のご発表の資料の最後の方にダイバーシティであるとか、障がい者のインクルージョンの話がございましたが、パラリンピックをめぐる環境が、このあたりのものをシンボリックに担っているんじゃないかというふうに感じているんですけども、そのあたりのことについて、今お考えがあれば教えていただきたいです。もしくは、64年大会のパラについては、人々がボランティアとして身を投じる文脈みたいなものが、まあオリンピックよりは明確にあるのかなと感じるので、そのあたりのことについて何かお考えがあれば、教えていただきたいということです。

2点目が浜田先生なんですけれども、先ほどのお話の中で、物語のあるものをちょっと設定しにくいんじゃないかというお話だったんですけども、こちらも資料の最後の方に競技志向に走ることなくってということが皆生らしさということでご発表いただいたかと思うんですけども、これがある種物語のようにも受け取れたので、この競技志向に走らない皆生らしさみたいなものをつないでいくというのが、物語として強度が弱いと言いますか、人々の中で共有されるにはなかなか難しくて、協会

がこういう風に言っていることなのか、そのあたりのことを教えていただければと思います。よろしくお願いします。

【仁平】 今日、オリンピックのやりがい搾取という話を中心だったんですけども、ご指摘のように、これがパラリンピックに変わるだけで全然議論の構図が変わってくると思いますし、やりがい搾取にしても、パラリンピックのボランティア批判はまずできないだろうなって思います。たぶん批判している方も最初からパラリンピックは念頭にないという状況ではないかと思います。ご存知だと思いますけども、4年に1回知的障がい者のスポーツ大会であるスペシャルオリンピックスっていう国際大会が行われておりまして、多分ほとんど報道されていないんじゃないかと思いますが、あれもほとんどボランティアによって支えられて、草の根で息長く続いている活動ですよ。そこに参加しようっていうボランティアは一定程度いるし、かなり熱意のあるボランティアも生まれ得る領域だと思います。

ただしそうなってくると、今度はやりがい搾取批判ではなく、スペシャルオリンピックスの予算が桁違いに少なく、ほとんどボランティアやスタッフが身銭を切って回さなきゃいけないような状況を強いる構図を批判しなきゃいけないかなと思いますけども、少なくともやりがい搾取という観点とは批判の議論の構図は変わっ

てくると思います。その意味では「オリンピックとパラリンピック」ってまとめられることが多いですけども、おそらく両者が乗っかっている意味のシステム、意味論っていうのは全然違っているなというように思います。

【浜田】 ありがとうございます。競技志向ではないというところが物語としてどの程度機能しているのか、共有されているのかというお話だったかと思います。ちょっと見辛いと思うんですけども、これは今年の大会のパンフレットで、冒頭には「BRAVE & TRUE」と書いてあります。おそらく選手の勇敢な挑戦に真実があるみたいな意味だと思います。その下にサブタイトルとして「目指す人、支える人、心ひとつに」と書いてあります。基本的にはまず選手がすごく過酷な競技に挑むということが前提になっていて、それを支える人たちがいるということです。そしてサブタイトルの支えるという中に競技志向じゃない部分、さらに言えば競技に介入してくる非公式な第三者の存在までが実際に



は含まれています。皆生は交通規制をしていない、できないという話をしたかと思うんですけど、ということはコース内に一般車両に交じって例えば応援の人が入ってくることができます。あるいは自由にコースを移動して、どこかにテントを建てて選手を支援するということができるようになっています。普通の競技スポーツならそもそもコースには入れないのですが、仮にそういう人たちが入ってくるのを排除しようとしてもしきれないという事情があります。その中で例えば応援車両と選手がぶつかる事故も起きたりしています。このように競技志向とは異なるふれあいには公式のボランティアなどとは違って安易に正当化できない、物語としては前面に出せない部分もあります。一方でそれらのふれあいは大会の大きな魅力にもなっていて、過酷な競技というところと、人と人のふれあいや出会いというところのあいだの駆け引きというか、問題が併存しているなかで良いところだけ物語として強調したり共有したりというのは、少ししづらいのかもしれません。

皆生に競技になっていない部分があるというのは経験的にも歴史的にも認知されていることなので、取り締まりも厳しくはなされていません。先ほどの審判の写真なんかを見ていただいても分かると思うんですけども、見逃すべきところは見逃しています。反対に問題になっている応援する人と選手がぶつかる事故なんかしてい

うのは、今後対策していかなければいけないということになっています。皆生では与えられた条件の下でどういうふうに大会を行っていくのかということが常に変化しています。基本は競技という前提はあるけど徹底はしていない。一方でふれあいも大切にしたいけどそれも問題を含んでいるというところで、競技志向ではない部分の物語としての強度については重要だけど一部曖昧なところもあるというのが現状です。答えになっているどうかかわからないですけども。

【井上】 ありがとうございます。その他はいかがでしょうか。

【フロア2】 時間がないので、端的に教えていただきたいと思います。仁平先生がおっしゃったことですが、心理学や精神分析学ではボランティアは大事な概念でして、無償の行為、基本的にはそういうことです。まったく自由で自発的な行為なんだ、というのが私たちの概念だったんです。ところが先ほどのお話ですと、1970年代あたりから社会的な変化と同時に概念が、概念っていうか使用の仕方が変わってきたという風におっしゃいましたよね。そうするとリワードと言いますかね、やったことの報酬、これを求めることをボランティアとして考えていく使用法が出てきたとこういうふうに考えていいわけですか。もしそうだとするならば、言語的な概念で

すね、ボランティアという、これは変わってきたということでしょうか。スポーツ・ボランティア、今の社会現象としては分かりますけども学問的にいろいろありますね。いろいろな学問がね。その概念も変わってきたと考えると良いんでしょうか。あるいは石坂さんがおっしゃったことで、非常に同じなのかなと思ったのですがサポーターという言葉、スポーツサポーターとスポーツ・ボランティアですね。この違いがだんだんなくなってきたのかなという感じに受けたのですが、その辺どうでしょう。

【仁平】 ありがとうございます。私のベースは社会学で、どうしても本質っていうものを措定しないで、言葉の使用のされ方とか機能を分析するというアプローチなので、なかなか本質の議論はしばらくのところがあるんですが、日本においては、一方で推進者や実際にやっている人は素直にリウオードっていう部分を認めることが多いと思うんですけども、時々社会の中から、純粹贈与じゃないといけないというような議論も沸き上がると思うんです。例えば、それは単位目当てだろうとか、それは自己満足ではないかとか、本当に相手のためにやっているのかとか、少しでも「自己満足」と見なせるところがあると感じたら、「それは真のボランティアではない」という噛みつき方をするコミュニケーションが、ボランティアを巡ってしばしば行われる。この時、その批判者は意識してかせ

ずか、純粹贈与というボランティア概念に基づいて、今いる目の前のボランティアを批判しているという構図だと思います。

ですから、特に推進側としては敷居を下げるために、報酬を認めていいんだよということを強調してきましたし、実際に活動しているとそういった部分は多分にありますので、それを肯定していいんだっていう形で広がってきた部分はあると思うんですけども、別のレイヤーでは、ボランティアっていうのはそもそも見返りを求めちゃいけないんでしょっていう意味の領域もまだ残ってしまっていて、それは現在行われているボランティアを批判する局面とかで顔を出すようなものなのだと思います。余談になりますが、語源論的なことを言えば、ボランティアという言葉は元々、近代の大きな動乱の中でヨーロッパの街が危機にさらされたときに、自分の街を自分で守る義勇兵から来ているので、他者のための純粹贈与ではなく、自分のリウオードを前提にした行為の方が先行しているという言い方もできます。その意味で、起源や概念史自体も一意的に決まらないということも申し添えておきたいなと思います。

【井上】 ありがとうございます。今日は皆さまの協力とそして、それぞれのシンポジストの先生方からは鋭い視点をもって考察していただき、私たちはまた、今後にむけて新たに考える機会を得ました。こ

の機会が、2020年の東京オリンピック・パラリンピック、そしてその後のスポーツ、あるいは社会のより良いあり方、そういうものに少しでもつながることを期待してこのシンポジウムを閉じたいと思います。

最後に、本学の小路田副学長より挨拶があります。

【小路田】 3人の先生方、ありがとうございました。本学の副学長をやっています、小路田と申します。今日話を聞いていて、私は歴史家ですので2点だけ感想を持ちました。物語がないという議論が今日の一番のメインだったんですが、物語のないものは無いと思っているんですね。必ず隠された物語があるはずだっていう。例えば、ベルリンオリンピックは第二次大戦につながっていく物語があったわけで、結果からしか見えないような物語というものがある。そこに人が巻き込まれていく、あるいは、自発的に参加することの意味とそれから逆の危険性みたいなものがあって、それを発見するというのがやはり研究者の仕事ではないかなと思っています。

ですから、これだけ人びとから批判を浴びているオリンピックが一体何のために行われようとしているのか、という物語を発見するべきではないかなと思っています。これがまず1点。

それからもう1つが、ボランティアの話は面白いなと思いました。最初に仁平先生にご紹介いただいたばろくその悪口、あの



ようなのは大好きです。見てると痛快な気分がして、もっと書け、もっと書けと思うのですが、ただそのような批判が起こってくるということを考えるときに、日本史をやっている立場で言うと、公の仕事でボランティア、無償で報酬を受けない人の参加を得ない仕事は基本的に無いと思うんですね。だから官治は必ず人治によって補われているというように思っています。戦前において、それは名誉職という概念で定義されていましてから、例えば、町会議員とか村会議員とか村長さんとか、みんな原則はタダです。無償です。それが戦後、日本が戦争に負けたときに、全部有償化されていったんですね。だから逆に言うと、ボランティアで公の仕事をする人たちがどんどん消えていって、全部ペイバックがある、お金が伴うという、そのような社会になっていったということです。市会議員ですら今はお金をもらっていますよね。でも世界的に言うと、市会議員とか町会議員とかは、経費は当然もらわなくちゃいけないですけども、それ以上はもらわないというのが、むしろ自然だという感じがするのです。でも今はお金をもらう社会

になってきました。ですから、逆にボランティアというのは公のところから消えていった、戦後の歴史というものを持っていて、そこに阪神淡路の震災以降、改めてボランティアというのが大きな社会的力を持って登場したのかなという印象を持っています。

ですからここには、ものすごく大きな可能性があるような気がして、それが公の仕事をサポートするというような段階から、この東京オリンピックのすごいのは、そのボランティアをやろうとか、あるいはボランティアに参加する気がないという議論をしながら、それが社会に対して文句を言い始めたというように考えてみると、結構この悪口も面白いのかなと思うわけです。

以上 2 点が今日の話を聞いて自分なりに得た感想です。奈良女子大学はこの取り組みを 6 回目ですよ、やってきました。副学長になって今の文科省が嫌いな点が 1 点あります。大学に対してものを求めるのに、知恵を絞れということだけ求めない。働けということだけ求める。このオリンピックでもそうです。全国の大学と協定を結ぶときも、大会を盛り上げろということは言うのですが、考えろということを行わないのです。大学という高等教育機関に対して知恵を貸してくれということを絶対に言わずに、働けとしか言わない。ですけども、やはり我々は大学として知恵を出したいというように思って、6 年前からこういうことをして、今日に至っているとい

うことです。考える大学としてこういう取り組みを今後も続けていきたいと思っています。どうも今日は長時間ありがとうございます。

【井上】 ありがとうございます。今日は大変お忙しい中おいでいただいたシンポジストの先生方に、改めてお礼を申し上げます。皆様拍手でお願いいたします。それではこれを持ちまして本日のシンポジウムは終了いたします。皆様ありがとうございました。（終了）

文献

- 1) 荒井貞光 (1987) 「コートの外」より 愛をこめスポーツ空間の人間学一。遊戯社：東京。
- 2) 荒井貞光 (2003) クラブ文化が人を育てる一学校・地域を再生するスポーツクラブ論一。大修館書店：東京。
- 3) ぶる速・VIP (2018) <http://burusoku-vip.com/archives/1889323.html?jprank=4&cat=243>.
- 4) 吹浦忠正 (2016) 往時 20 歳の最年少職員が語る東京五輪「国旗」物語。週刊新潮, 2016 年 8 月 11・18 日号。
- 5) 浜田雄介 (2017) 純粹贈与としてのエンデュランススポーツ・広島市立大学国際学部〈際〉研究フォーラム編〈際〉からの探究。文眞堂：東京, pp. 210-221.
- 6) 浜田雄介 (2013) エンデュランススポーツの体験に関する一考察一広島県

- 西部のトライアスリートの事例から
ー. スポーツ社会学研究 21(1): 111-
119.
- 7) 石坂友司 (2018) 現代オリンピックの
発展と危機 1940-2020—二度目の東
京を目指すもの—. 人文書院: 京都.
- 8) 石坂友司・松林秀樹編 (2013) 〈オリ
ンピックの遺産〉の社会学. 青弓社:
東京.
- 9) 皆生トライアスロン協会 (1995)
FRONTIER 全日本トライアスロン
皆生 15 周年記念誌.
- 10) 皆生トライアスロン協会 (2018) 第 38
回全日本トライアスロン皆生大会競
技説明資料.
- 11) 小路田泰直・井上洋一・石坂友司編
(2018) 〈ニッポン〉のオリンピック
ー日本はオリンピズムとどう向き合
ってきたのか—. 青弓社: 東京.
- 12) 仁平典宏 (2011) 「ボランティア」の
誕生と終焉—〈贈与のパラドックス〉
の知識社会学—. 名古屋大学出版会:
名古屋.
- 13) 仁平典宏 (2016) 遍在化／空洞化する
「搾取」と労働としてのアート—やり
がい搾取論を越えて—・北田暁大ほか
編 社会の芸術／芸術問いう社会. フ
ィルムアート社: 東京, pp. 201-226.
- 14) 仁平典宏 (2018) 東京五輪ボランティ
アをやっぱり「やりがい搾取」と言い
たくなるワケ—過去の「動員」を思い
出す...—. 現代ビジネス, 2018.8.18.
- 15) 笹川スポーツ財団 (2014) スポーツラ
イフに関する調査. 笹川スポーツ財
団: 東京.

第6回 奈良女子大学

オリンピック・公開シンポジウム



日時 2018年11月17日(土)

14時～16時15分

会場 奈良女子大学 G棟101教室

シンポジスト

仁平典宏 (東京大学准教授)
「オリンピックボランティアと『物語』の動員
——「やりがい搾取」論を問直す」

石坂友司 (奈良女子大学准教授)
「長野オリンピックからみたスポーツ・ボランティア」

浜田雄介 (京都産業大学講師)
「トライアスロン大会におけるボランティアとは」

コーディネーター 井上洋一 (奈良女子大学教授)

主催 奈良女子大学生活環境学部心身健康学科スポーツ健康科学コース

入場無料/事前申込不要

オリンピックとスポーツ・ボランティア

シンポジウム開催の趣旨

2020年東京オリンピック・パラリンピックの開催にあたって、このムーブメントがどのような歴史的・社会的に継承されてきたのか、そしてそこに東京、日本がどのような意義を新たに書き込むことができるのかを検討することが重要である。

第6回目となる奈良女子大学・オリンピックシンポジウムは、ボランティアについて議論する。東京大会では8万人のボランティアの募集が行われ、その意義とやりがいが高められる一方、長時間にわたって活動に従事しなければならないことから、条件面への批判やボランティアそのものの本質を問う声も高まっている。一方で、昨今のマラソンブームに代表されるように、地域関心を喚起したイベント開催は、スポーツ・ボランティアと呼ばれる人びとの支援なしには成立しなくなっている。このようなイベントや地域社会、ボランティアとの関係性をどのように考えることができるのだろうか。

本シンポジウムでは、ボランティアにはどのような社会的意義があるのか、その存在が問いていく社会の可能性と課題について、東京大会との関係性から議論したい。

アクセス

近鉄奈良駅西側改札、右手出口より徒歩5分。
南門よりお入りください。当日は大学入試
実施のため、正門は利用できません。
お車の来学はできません。



登壇者

シンポジスト

仁平典宏 (東京大学准教授)

「滞在化/空間化する『物語』と労働としてのアート——やりがい搾取論を超えて」(北田晴大他編、2016、『社会の芸術/芸術という社会』フォルムアート社、201-236)
『「ボランティア」の誕生と終焉——戦後のバタックスの知識社会学』(2011、名古屋大学出版会)

石坂友司 (奈良女子大学准教授)

『現代オリンピックの発展と危機 1940-2020——二度目の東京が目指すもの』(2018、人文書院)
『「オリンピックの遺産」の社会学——長野オリンピックとその後の10年』(石坂友司・松林秀樹編、2013、青弓社)

浜田雄介 (京都産業大学講師)

「純粋無私としてのエンデュランススポーツ」(広島市立大学国際学部(部)研究フォーラム編、2017、『(部)からの探求』文芸堂、210-221)
「エンデュランススポーツの体験に関する一考察——広島県西部のトライアスリートの事例から」(2013、『スポーツ社会学研究』21(1): 111-119)

コーディネーター

井上洋一 (奈良女子大学教授)

『「ニッポン」のオリンピック——日本はオリビズムとどう向き合ってきたのか』(小路田幸直・井上洋一・石坂友司編、2018、青弓社)
『スポーツイベントの開催と環境保全』(官製情報誌監修、2017、『スポーツの法律相談』青林書院、328)

お問い合わせ先

奈良女子大学スポーツ健康科学コース 石坂友司 E-mail: yuhsibake@nara-wu.ac.jp / TEL: 074-22-5335